TOTO 通信

2017年 新春号

Toward a Creative Architectural Scene

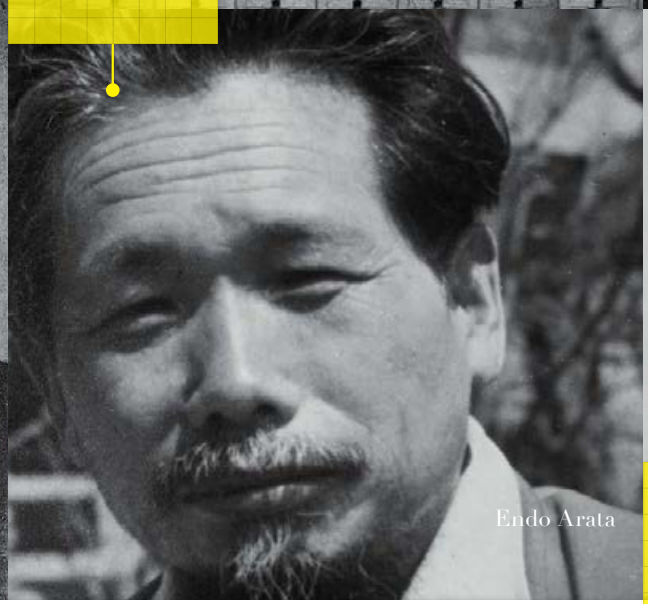
特集 アーキテクツ・ホスピタリティ

建築家の名作ホテルと旅館に学ぶ

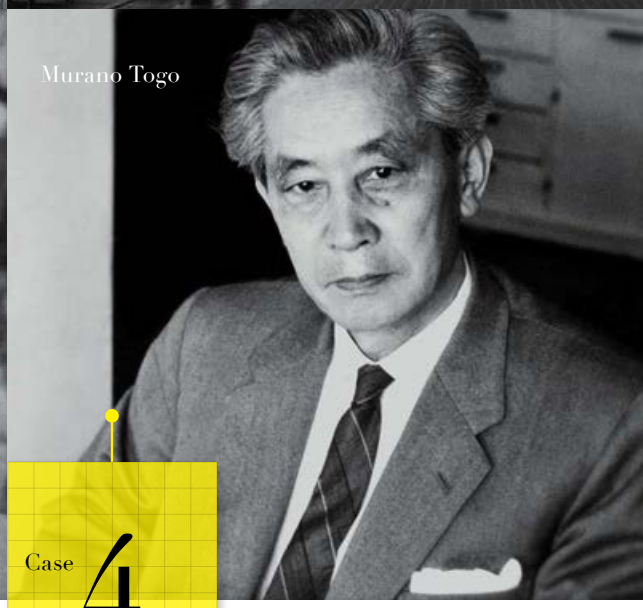
Special Feature

Architects' Hospitality

Case 3



Endo Arata



Murano Togo

Case 4

写真／川辺明伸（上）
出典／国立国会図書館ウェブサイト
「近代日本人の肖像」（下）

写真／山田新治郎（上）、提供／遠藤現建築創作所（下）

写真／山内紀人（上）、提供／MURANO design（下）

クツ・ホスピタリティ

1994年に始まった浦一也さんの連載「旅のバスルーム」が、第100回を迎えた。この23年のあいだにも、ホテルや旅館を取り巻く環境はいろいろと変化してきたが、変わらないものもあることに気がつく。やはり寸法や配置は人間にとって普遍的なところがあるし、その場を心地よく感じた想いは、時を超えて人々の心に響く。連載と連動して、かつて建築家が設計した老舗の名作ホテルや旅館を特集する。建築が長いあいだ使いつづけられてきたのは、もちろんソフト面の運営によるところが大きいが、あわせて建築の力も、それを後押ししてきたにちがいない。時には迎賓館として国家を背負い、あるいはリゾートとして非日常の醸出を求められただろう。それらは過去の話のようで、おそらく簡単には薄れない「人をもてなす」という意志の根本の結晶でもある。

浦 一也	4
設計（一部）／吉村順三	12
設計／辰野金吾	20
設計／遠藤 新	28
設計／村野藤吾	36

シリーズ

旅のバスルーム100	文・スケッチ／浦 一也 ザ・アッパー・ハウス（中華人民共和国・香港）	44
現代住宅併走36	文／藤森照信「天と地の家」設計／石井 修	46
最新水まわり物語42	星のや東京	52
地域に生きる会社72	ひまわりほーむ	58
TOTOギャラリー・間で展覧会をします	堀部安嗣展 建築の居場所	60
TOTO創立100周年特集	第1回「建築と歩んだ100年」	62
News File	TOTO News, Cera Trading News, Book	66

表紙写真／「俵屋」の客室「暁翠庵」。 表紙撮影／川辺明伸
編集制作／伏見編集室（62～65ページを除く）
デザイン／岡本一宣デザイン事務所（62～65ページを除く） 印刷／ゼネラルアサヒ

Special Feature

Architects' Hospitality

Case I

Interview

Case 2

写真／村井 修（上）、提供／PPS通信社（下）

写真／川辺明伸（上）、門馬金昭（下）

特集／アーキテ

建築家の名作ホテルと旅館に学ぶ

TOTO
通信

Toward a Creative Architectural Scene
Number 513
New Year 2017

インタビュー	フランク・ロイド・ライトの帝国ホテルを読み解く	
ケーススタディ1	書院と数寄屋、そして吉村建築から飛翔する	「俵屋」
ケーススタディ2	洋の骨格に、和の意匠をちりばめる	「奈良ホテル」
ケーススタディ3	西の帝国ホテルで、和洋のミックスに挑んだ	「旧甲子園ホテル」
ケーススタディ4	ホテルを躍動させる、村野藤吾のディテール	「ザ・プリンス 箱根芦ノ湖」

『TOTO通信』をインターネットでご覧いただけます。 → www.toto.co.jp/tsushin/

1968年に「帝国ホテル 旧本館（ライト館）」が取り壊される前に、建築家・明石信道氏らによって実測調査したうえで描かれた図面（東西の長手断面図）。7ページ、9ページ上段も同様の実測図（提供／早稲田大学図書館特別資料室）。

NO PHOTO

帝国ホテルを読み解く

かつてフランク・ロイド・ライトが来日し、
その才気を発揮して設計した「帝国ホテル 旧本館（ライト館）」。
ライトらしい意匠が際立つ、その渾身の力作を、
ホテル建築として読み解いていく。
連載「旅のバスルーム」が第100回を迎えるのを機に、
ホテルの目利きである浦一也さんに話を聞いた。

聞き手・まとめ／伏見 唯　写真／村井 修（帝国ホテル）、山内紀人（インタビュー風景）

Special Feature
Architects' Hospitality
Interview

Ura Kazuya

インタビュー 浦 一也

1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。おもにホテルの設計を担当。99～2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームⅡ』（光文社）がある。1994年から『TOTO通信』にて「旅のバスルーム」を連載。
おもな作品＝「ロテル・ド・ロテル」（88）、「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル」（91）、「京都迎賓館」（2005）。

竣工
1923

NO PHOTO

フランク・ロイド・ライトの

Frank Lloyd Wright

提供／PPS通信社

1867年アメリカ合衆国ウィスコンシン州生まれ。シカゴのルイス・サリヴァンのもとで働き、93年に独立。住宅を中心に設計をつづけ、屋根や連窓などによって水平性を強調した「プレイリースタイル（草原様式）」と呼ばれる作風で知られるようになる。自然と融和する建築として「有機的建築」を提唱し、実践した。
1916年帝国ホテルの支配人・林愛作から、帝国ホテルの設計を依頼される。日本人建築家の弟子に、遠藤新、土浦亀城、田上義也などがいる。
おもな作品＝「ロビー邸」(1906)、「落水荘」(36)、「グッゲンハイム美術館」(59)。

基本階のロビー

「帝国ホテル 旧本館（ライト館）」が取り壊される前に、写真家・村井修氏が記録として撮影した写真（7、8ページの大食堂と客室の写真も同様）。ロビーは、大谷石でつくられたマヤ遺跡風の意匠が特徴。

浦さんと帝国ホテルとの出会い

——今号では、かつて建築家が設計したホテルや旅館を特集していきますが、「建築家のホテル」といえば、日本では多くの人が、フランク・ロイド・ライトの「帝国ホテル 旧本館（ライト館）」（1923）を思い浮かべるのではないかと思います。

連載「旅のバスルーム」（44～45ページ）が第100回を迎えるにあたり、ホテルの目利きである浦さんに、ライト館についてのお話をうかがいます。当時のライト館を、実際にご覧になられたのでしょうか。

浦 一也　小学2年生くらいのときに、父に連れられて行ったことがあります。確か、誰か人に会うためだったようで、泊まったわけではありません。ですから、客室には一度も入ったことはないのですが、おぼろげながら、ロビーの不思議な意匠の記憶はあります。あのマヤ遺跡のような意匠。なんだか薄暗いロビーだな、とも感じました（笑）。小学生の頃の記憶はあまりないのですが、ライト館のロビーのことは、ちょっとだけ覚えています。

——小学生の頃から、ホテルを見る機会があったのですね。

浦　私の祖父は、北海道の登別グランドホテルの支配人（浦源次郎）でした。ただ当時は、まさか自分がホテルの設計を仕事にしていくとは、思いもしませんでした（笑）。

——どういったきっかけで、ホテルを専門にされたのでしょうか。

浦　大学を卒業して、日建設計に入社して1年くらいたったとき、上司の林昌二さんに「何をやっていくのか」と問われたのです。「私は何屋です」というように、得意とする看板をもつようにすすめられたのですが、それに対して、「ホテル屋になろうかと思います」と答えました。どうしてホテルだったのかは、はっきりとはわかりませんが、やはり祖父のこともあって、ホテルが身近だったのだと思います。当時、日建設計はあまりホテルを設計していなかったということもあり、林さんも、おもしろいと言ってくれました。

——ホテルを選んだきっかけのひとつとして、帝国ホテルの記憶もありますか。

Ura Kazuya

「小学生の頃に、父に連れられて
帝国ホテルに行きました。
ロビーの不思議な意匠を
おぼろげながら覚えています」

浦　頭の中に少しはあったかもしれません。ただ、ライト館のような建築をつくろうとは思っていませんでした。世の中、そういう時代ではなく、東京オリンピックの後に、どんどん新しいホテルができていき、古いホテルが壊されていくのを見てきました。ライト館も、私が大学に入った翌年、67年に閉鎖されました。東京藝術大学では「帝国ホテルを守る会」の活動が盛んで、その末端の学生として、ビラ配りを手伝わされました。

かつてホテルは迎賓館のような存在だった

——その後の新しいホテルは、ライト館とは異なるものだったのですね。

浦　はい。今の流れにつながりますが、とてもプラグマティックなホテルが建てられていきます。昔のホテルは、今とはまったく異なるものなんです。ですから、動線の長さや設備の性能などから、ライト館を現代のホテルとして評価するのは酷な話なんですよ。

ライトが帝国ホテルの設計を依頼された頃は、ホテルは外国人のための施設だったのです。1910年代に外国人の観光客が増大し、国策として外国人が泊まれるところをつくる必要がありました。日本のホテルの歴史は、外国人の宿泊施設をつくるという国策から始まったといえ、当時、日本人の宿泊客は、とても少なかったと思います。

——そうした外国人に対する迎賓館のような役割は、ロビーなどのパブリック・スペースに現れています。

浦　ええ、このライト館は、ロビー、大食堂、オーディトリウム、饗宴場などのパブリックの意匠にすごく力が入っています。階段で徐々に上っていく構成も、壮大なものです。宿泊だけでなく、交流の場という役割が求められたのでしょうね。外国と日本の接点のような場所だったと思います。隣が、あの「鹿鳴館」（設計：ジョサイア・コンドル／1883）ですから、ライト館も食事をするということに重きを置いて、中央の大きな食堂は、まさに国の迎賓館のように使われていたのだろうと想像します。

——ロビーや大食堂などのパブリックの意匠について、どう思われますか。

浦　造形物として見ると、やはりすごいと感じますよね。こういったマヤ遺跡のスタイルは、それまではほとんどありませんでしたし、ライトも苦労しただろうと思います。日本に来て大谷石に出会い、工作が楽で、しかも職人も揃っている素材があることを知る。これによっていろいろなことが実現できる、ということで発想がどんどんふくらんで

基本階の大食堂

エントランスから入ると、ロビーの奥に吹抜けの大きな食堂が広がっている。

平面図（実測図）

ロビーや大食堂のある中央の共用部と、両翼に客室が配された3層2ウイングの構成が特徴。

NO PHOTO

主階平面図
Main floor plan

NO PHOTO

基本階平面図
Ground floor plan

N
0　10　20m　1/2,000

いったのでしょうね。

ただ、小学生のときに見た記憶では、この大谷石はボロボロになっていました。大谷石を四角い切石として積んでいく文化は、日本には昔からありましたが、こういった工芸的な表現に使われた経験が少なかったので、表面の耐久性は試行錯誤の部分もあったのだと思います。

――大きなホテルの割に、フロントが小さいです。

浦　今のホテルでは、エントランスの正面に、まずは大きなフロントがあることが多く、ぜんぜん違いますよね。ただ、アメリカ発祥のヒルトン系とは違って、ヨーロッパのホテルだと、こういう小さなフロントもあります。古い建物を転用するので、フロントから計画したわけではないことが、理由のひとつですが、もうひとつは、プライバシーや防犯面もあります。フロントは、お金を出し入れするところですから、後ろを人が通れないように、小さなスペースのほうがよいこともあります。

ライト館を見ると、こんなに大きなホテルなのに、こんなに小さなフロントでおかしいと思うかもしれませんが、きっと個人客が多かったのでしょうね。今みたいに、団体客やツアー客がずらっと並ぶようなフロントではなかったのだと思います。

すべての客室のデザインを変えた

――客室を見ていきたいと思います。取り壊し前に建築家の明石信道さんが実測した図面と、写真家の村井修さんが撮影した写真があります。南北の両翼に客室がまとまっていますね。

浦　実測図を数えると、おそらく228ベイあります。客室数が何室だったかはわかりませんが、隣室同士をつなげるコネクティング・ドアがありますから、1部屋を2ベイ以上としてスイートにしたりしていたのだと思います。これは、帝国ホテルの営業方針だったのでしょうね。

――コネクティング・ルームは、こんなに昔からあったのですか。

客室（ツイン）

取り壊し前の帝国ホテルを実測した明石信道氏は「客室は質素でほの暗く、瞑想に適する部屋を思わせた」と記している。

「ライトの帝国ホテルは、
現在のプラグマティックな
ホテルとは、
異なる考えでつくられています」

Ura Kazuya

浦　こういった同じような部屋がたくさん並んでいるときに、たとえば2室をつなげて、片方をベッドルームにして、もう片方をリビングにする、というものですね。昔は主人と従者が泊まる部屋を分けたりとか、たくさんの家族が泊まるときなどに使われていました。昔からありますよ。ただ、最近では寝室からすぐにドアが見えるのを嫌うので、コネクティング・ドアでつなげたスイートは減ってきています。

――両翼に客室が並ぶ配置はいかがでしょうか。

浦　ライトがシカゴ博覧会で見た日本の「鳳凰殿」（平等院鳳凰堂をモデルにした建築／1893）との関連も指摘されていますが、客室棟は3層2ウイングで、中廊下の両脇に客室を配置しています。廊下を挟んで、対面する客室のドアと向かい合っていますが、プライバシーの観点で、今ではこれはできるだけ避けるように、とホテルの計画原論では指摘されています（笑）。

それと、廊下がすごく長いですね。130mくらいあります。エレベータをどれくらい使ったのかはわかりませんが、エレベータから最長で80mは歩きます。客室の多くが廊下方向に長い「横型」なので、十分な採光と眺望が得られるのですが、その分、廊下が長くなる構成です。現在のプラグマティックなホテルのあり方とは異なるものです。ホテルの設計のあり方が、まだまだ試行錯誤だった時代です。

――なるほど、現代では避けている配置なのですね。

浦　よい側面もあります。『現代建築の巨匠――20世紀の空間を創造した人々』（ペーター・ブレイク著、彰国社）によると、ライトはすべての客室のデザインを変えたのだそうです。カーペットや壁紙のような内装だけ変えたのか、レイアウトを変えたのかは、よくわかりませんが、確かに平面図を見ても、いろいろなタイプがあり、少しずつ違うことがわかります。これは魅力的で、特筆に値すべきことです。

今でもホテルの設計依頼を受けた建築家なら、ライトのように全室変えたいと思うかもしれませんが、プラグマティックな考え方からすると、「縦型」の部屋をざっと並べるのが、今のホテルの普通のつくり方なんです。

小さな客室と大きな寸法

――客室の内部はいかがでしょうか。

浦　客室のデザインは、かなり簡素ですね。パブリックの豊かな装飾とは対照的です。おそらくオリジナルには、ライトがデザインした家具があったのだと思います。それと実測図の客室は、幅約6・9m、奥行き約4・2mの29㎡弱ですから、ずいぶんと小ぶりにできています。フランスやドイツのホテルでは、大きな館のような客室が多いのですが、これは小さい。外国人の宿泊者に「日本滞在」を感じさせるために、客室をやや簡素にして小ぶりにつくるなどの配慮があったのかもしれません。

テラスに出るところのガラス窓の高さが5フィート（約1524㎜）しかなかったそうです。メインの出入口は別にあったからよかったのでしょうが、意図的に寸法を抑えているところがあったようなんです。

――頭をぶつけてしまいそうです（笑）。ライトは、やはりフィートで計画をしていたのですね。

浦　実測図を見ると、客室のユニット・ライン（おもに室内にかかわるモデュール）は4フィート（約1219㎜）です。ライトが考える4フィートは、ヒューマンスケールや施工に最適な寸法だったのでしょうね。そして、その5倍の20フ

客室平面図および展開図（実測図）

NO PHOTO

N

0　1　2m

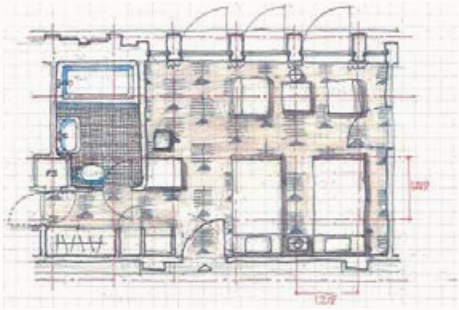
1/150

浦一也さんによる客室の家具レイアウト案

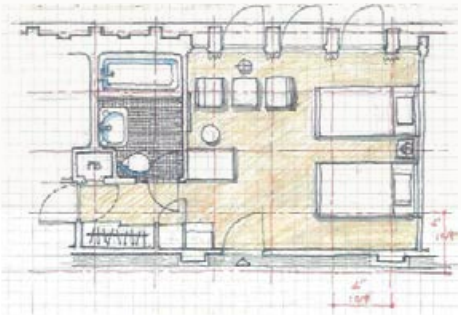
0　1　2m

N

A案



B案



浦一也さんが推測した客室内の家具のレイアウトのパターン。記録写真（8ページ）を見るとB案の配置だが、A案もあり得る構成になっている。

1/150

ィートを太く描き（シック・ライン）、全体の規則にしていたようです。日本のモデュールの3尺（約910㎜）より大きいのですが、いろいろと使い勝手がよかったと思います。

——どういった利点のあるモデュールなのでしょうか。

浦　ドアなどが、少しゆったりと設計できます。4フィートあれば、ドアとその脇に袖壁などがあっても余裕があります。また、5倍すれば、建物全体のモデュールになるうえ、半分の2フィートにするなど、細部の設計でも割り切りやすい寸法ですから。

——比較的、水まわりのスペースは広いですよね。

浦　海外から機器を輸入したのだと思いますが、バスタブや洗面器などは大きいですね。バスタブは内寸で1500㎜くらいありますから、当時としてはかなり大きいです。日本人の平均身長は、今より10㎝くらい低いので、なおさらです。ワードローブも大きめですし、外国人の利用しかなかったことを思わせます。ちなみにバスルームのドアが、内外の両方に開くスイングドアになっています。ドアの横にもガラスのようなものがありますし、中が見えるということですから、これがオリジナルだとするとたいへん特徴的なのですが、理由はちょっとわかりません。

——そのほか、寸法で気になるところはありますか。

浦　写真（8ページ）を見ていただくとわかるのですが、ドアノブの位置がすごく高いんですよ。1300㎜以上あると思います。今は、1000㎜や1050㎜くらいが標準ですから、これも外国人のための寸法だと思います。ほかの古いホテルでもドアノブの位置が高い傾向がありました。ライトは、つま先立ちの人間の姿をすごく美しいと感じていたそうですが、どうでしょうか。子どもだと、手が届きませんね（笑）。

日本人を意識して小ぶりにつくったと思えるのですが、やはり人が触れるところの寸法は大きくつくられています。日本でつくりながらも、外国人が利用する、ということが、寸法にも現れているのかもしれません。

家具をレイアウトしやすい平面

——オリジナルのときは、どのようなレイアウトだったのでしょうね。

浦　オリジナルを予想したレイアウトを2案のスケッチ（9ページ）で考えてみました。村井さんの写真だとB案になっているのですが、A案の配置もあり得たと思います。正方形に近い客室ですから、どちらのレイアウトも可能ですし、スペース配分や動線などに過不足がないです。プランニングしやすい構成だと思います。

ひとつ気になったのは、ドアの開き勝手です。明石さんの実測図だと、ドアが廊下から見て右勝手になっているのですが、そうするとドアを開けてすぐにベッドが視界に入ります。もしかしたら後に改修された結果なのかもしれず、私はもともとは左勝手だったのではないかと思います。おそらくオリジナルから改修は何度かされていて、床もカーペットではなく、最初は縁甲板だったのではないかという気がしています。

——家具は造り付けも多いです。

浦　そうですね。ライトはフリースタンディングの家具もたくさんつくって、パブリック・スペースを彩っていましたが、客室は造り付けが多いです。そのほうがデザインの統一がとれるということもあると思いますし、もしかしたら安かったのかもしれません。

Ura Kazuya

「日本好きのライトが、帝国ホテルを日本的につくらなかったことの意味を、今一度、振り返るべきかもしれません」

——帝国ホテルの設計をライトに頼んだ林愛作を支配人として、ライトの弟子の遠藤新が、関西に甲子園ホテル（28～35ページ）を設計しましたが、ライトは遠藤に対して家具が多すぎる、と手紙で指摘したのだそうです。

浦　もともと日本の家には、造り付けも含めて、家具がほとんどありませんでした。せいぜい、ちゃぶ台を出してきて座布団を並べるくらいです。世界的に見ても、家具を部屋の中央に置く民族と、壁に押しつける民族がいます。家具のとらえ方は、民族によって異なります。だから、日本人は今でも、家具の置き方があまりうまくはないと思います。慣れていないということと、どこか家具がないほうがよい、という考えがあるのだと思うんです。

あえて、日本的なところをなくす

——遠藤の甲子園ホテルは、外観はとてもライトの建築に似ていますが、客室には和室を設けて、日本的なところがあります。

浦　帝国ホテルは、やはりライトの世界でつくられていますが、甲子園ホテルでは林さんと遠藤さんが、「和洋折

裏」を目指して、日本の理想のホテルをつくろうとしたのでしょう。遠藤さんのスケッチ（33ページ）を見ると、洋室より和室の床を20～30㎝くらい上げて、床座と椅子座の視点の高さを揃えようとしています。

ライトは畳を入れませんでしたが、遠藤さんたちは入れている。これはたいへん大きなことだったと思います。今の「和洋折衷」のホテルの原型をつくったようなものです。それがよいかどうかは別として、ホテルなので洋室だが、旅館のように畳もあるということで、当時、すごく好評だったそうです。

――今では、住宅も含めて、洋室の隣に和室があるというのは、一般的な光景です。

浦　私は、今でも「和洋折衷」は必ずしもうまくいっていないと思っています。遠藤さんが床の高さを変えて苦労したように、和と洋では寸法の体系がまったく異なるものなのと、洋室には家具がたくさんあるのに、和室には家具がない、というアンバランスが生まれます。畳がほしいという要望があるのはわかりますが、建築家やデザイナーは苦労するものなんです。だから、たとえば洋室と和室は、まったく別室につくるということでもよかったのではないでしょうか。和洋をどうするか、古い課題のような気がしますが、今でも考えるべき永遠の課題だと思います。

――ライトは、なぜ和室をつくらなかったのでしょうか。ライトが設計した芦屋の「旧山邑家住宅」（１９２４）には、和室がありますよね。

浦　ライトは日本が大好きでした。もともと浮世絵好きでしたし、日本に長く滞在するなかで畳の生活についても考えをめぐらせたことだろうと思います。だから当然、帝国ホテルに日本的な要素を入れることも考えたはずなんです。でも、それはまったくない。障子や畳もありませんし、庭との関係も日本らしくないですし、意匠はマヤ遺跡風です。

私は思うのですが、おそらくライトは日本で設計しながらも、自分が国際的なホテルを要求されているということがよくわかっていたのではないでしょうか。一方でライトがアメリカで設計したプレイリースタイル（水平性を強調したライトの建築様式）の建築を見ると、むしろ日本的な印象を受けます。林さんがライトにどのような依頼をしたのかはわかりませんが、少なくともライト自身は、日本的な印象を意図的に避けたように感じます。自分の役割を自覚していたんです。

その結果、このマヤ遺跡の意匠のパブリック・スペースは、国際的なホテルや外国の象徴として、日本人の記憶に残りました。あれだけの日本好きが、日本で日本的なものを封印したということを、振り返るべきだと思います。ライトは、しっかりと時代に応えていたんです。

――ライトのホテル建築から、今学ぶべきことはありますか。

浦　現在のホテルの多くは、アメリカ発祥のヒルトン系ホテルの影響が強く、同じ客室を「縦型」でずらっと並べるような、実利的、功利的な方向になってきています。ただ、そういう効率重視の考えはオーナーにとってはよくても、泊まる人にとっては関係のないことです。

そのためライトの建築を見ると、オーナー側やつくり手側の思想ではなくて、もう一度、使い手側の思想で計画をしていきたいと考えさせられます。時代や使い手に合わせて意匠を選択するとか、いろいろなタイプの部屋を用意するとか。

タブレット端末を導入したりするなど、技術も進化していくなかで、ホテルは、これからどんどん変わっていくと、私は予想しています。そのときに、かつてのオーダーメイドのようなつくり方を原点として見直すのは、重要なことではないかと思っています。

帝国ホテルの正面外観。エントランスと客室のウイングが、コの字に池を囲んでいる。

「帝国ホテル 旧本館（ライト館）」

建築概要	
旧所在地	東京都千代田区内幸町
	現在は、中央玄関部のみ、
	明治村に移築復元
主要用途	宿泊施設
建築主	帝国ホテル
設計	フランク・ロイド・ライト
施工	大倉組土木部（工事施工運営）
	ただし、工事はホテル直営
敷地面積	14,534.42㎡
建築面積	7,141.01㎡
延床面積	29,107.35㎡
階数	地上3階（一部4階および6階）、
	地下1階
構造	鉄筋コンクリート造、一部煉瓦造
竣工	1923年

提供／ＰＰＳ通信社

Frank Lloyd Wright

フランク・ロイド・ライト

京都の老舗旅館「俵屋」の建築は、変化しつづけている。
江戸時代につくられた風格ある書院風の建築から、
明治時代に数寄屋風になり、そして吉村順三が昭和に増築。
さらに当主・佐藤年（よし）さんの好みが加わって改修がなされ、華やかな飛翔が遂げられつつある。

書院と数寄屋、そして吉村建築から飛翔する

取材・文／伊藤公文　写真／川辺明伸

Yoshimura Junzo

Tatsuno Kingo

Endo Arata

Murano Togo

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study

1

設計（一部）

吉村順三

作品

俵屋

竣工
1958
（本館増築部）
1965
（新館）

吉村順三の設計により増築した新館（鉄筋コンクリート造）の客室「暁翠庵」から、庭を見る。

星の数ほどの賛辞が捧げられ、止むことがない。国内外の超一流の要人が訪れてはリピーターとなる。1年を通して予約をとるのが難しく、めったなことでは足を踏み入れられない。そうした虚実ないまぜの評判やエピソードが大きな渦を形成している。その中心に客室18室の小さな旅館、京都「俵屋」がある。

変わりつづける老舗

創業は約300年前。現在の島根県浜田市にあった呉服問屋が京都に支店を出し、本業の傍ら藩士たちに宿を提供するうちに、そちらのほうが本業になったという。

幕末の焼失の後、明治初年に6代目当主岡崎和助の手で木造2階建てが順次建て増しされ、復興が遂げられた。その原型は残しつつ書院風から数寄屋風へ改築したのが8代目岡崎和助で、1927（昭和2）年頃には全8室の大要が定まった（本館）。外塀、入口、玄関、中坪と続く絶妙のアプローチ空間は当時のまま今に残り、99年には登録有形文化財に指定されている。11代の当主、佐藤年さんも、この空間を後世に至るまで絶対に手を加えてはならない聖域と明言している。

戦後、49年に国際観光ホテル整備法が制定され、国際観光旅館登録の要件が示された。10室以上の客室、隣室とのあいだを壁で仕切る、踏込みまたは次の間を設ける、テーブルや椅子を配した3㎡以上の広縁を設けるなどである。この難題をクリアするための諸々の相談にのったのが、アントニン・レーモンドに師事し、日本の伝統とモダニズムを融合した独自のスタンスを確立していた吉村順三だった。吉村は師レーモンドとともに俵屋を京都の定宿としていて、先代の当主となじみがあったためである。

客室「暁翠庵」の和室。本館との境に配された塀を背景として、竹林がまるで床の間に飾られた掛け軸のように映えている。

南側の敷地を買い増して木造平屋の2室を建てる際も吉村に設計が依頼され、58年に竣工した（本館増築部）。これで10室となり、ようやく国際観光旅館として登録された。その後、海外からの客の増加もあって北側に鉄筋コンクリート造の3階建て、8室の増築が敢行された。設計はやはり吉村に委ねられ、65年に竣工（新館）。これで18室の全容がなった。

そこから現在に至るまでの半世紀、当主の年さんは夫のアーネスト・サトウ（写真家。27〜90年）の鋭敏な感性に強く啓発されながら、天性のクリエイティブな才能を全開させて、営業を停止することなく、ほぼ1年に1室のペースで俵屋の空間の更新を先導しつづけてきた。その伴走を務めたのが棟梁中村外二と彼が率いる職人集団で、代替わりした今は中村義明を筆頭とする中村外二工務店がその役割を引き継いでいる。

つねに繊細に動いている

手元に65年の新館竣工時の平面図がある。

本館を核とし、その空間構成を損なわずに南北に増築を重ねた姿は、広くはない敷地を隅々まで余すところなく使い切って一分の隙もなく、ジグソーパズルのように精密に入り組み、部分的な組み換えは不可能のように見える。

けれども宿泊施設として業を営んでいる以上は、時代の要請に応じ、あるいはそれに先んじたアップデートが欠かせない。京都の中心部にあり、敷地にゆとりがなく、静穏を望む宿泊者が絶えないところで、極度の慎重さが求められる改修作業を差配してきたのが年さんであり、中村外二工務店なのである。

さらに時期を異にする数枚の平面図があり、それぞれ改修過程の一断面を示している。そこには意想外の大きな改変が認められるかと思えば、仔細に見て初めて気がつく小さな違いが潜んでいたりする。いずれにしろ全体が静かに停止することは一瞬もなかったのである。

既存の本館や庭との融合を果たした吉村順三の増築。限られた敷地において、巧みな配置がなされている。

Yoshimura Junzo

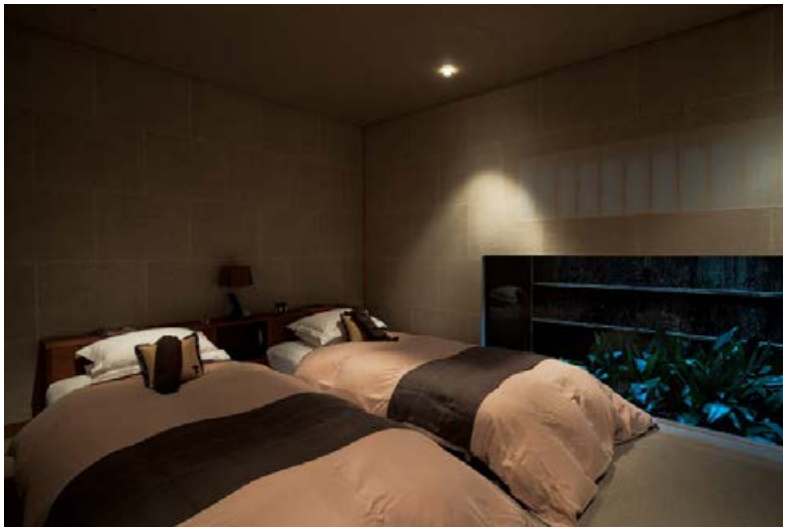
Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
1

↑庭から和室を見る。鉄筋コンクリート造であることを生かして、隅柱のない開口部をつくり出している。縁側は、竹の簀の子縁に改修されている。

客室 「暁翠庵」 1

←浴室。半埋め込み型の浴槽からの目線は低く、地窓からの風景を眺めることができる。竣工後に当主の好みで改修されたもの。

↓客室へのアプローチ。新館から一度外に出て、板敷きの廊下を通って、客室に至る配置になっている。



↓寝室。食寝を分離する考えで改修され、一般的な旅館のように和室に布団を敷くのではなく、ベッドを置いた寝室が設けられている。

 ●の数字は平面図（18〜19ページ）と対応。

吉村順三が設計した木造の本館増築部の客室。内装は後に改修されたもの。和室は土間を介して、開口部いっぱいに東側の庭とつながっている。

客室「栄」

2

和室の隣にある寝室と、椅子の置かれた小間。床のレベルが徐々に下がっている。庭を望みやすい視線の高さが設定されている。

当主の好みが映えている

年さんが改修を思い立ったのは吉村建築の定番である天井のラワン合板が発端だった。その質感がどうしても受け入れられず杉の中杢に替えたのだ。しかし常連客でもそれに気がつく人は少なかったという。それほどラワン合板の天井は和室の客間に違和感なく納まっていたのである。吉村デザインの真骨頂を示すエピソードといえよう。

そうして始まった改修には定式がない。融通無碍、変幻自在。建築家・中村好文さんの言葉を借りると「年好み」というしかない世界が館内中に展開しているのだが、改修の大きな方向性は以下であろうか。

ひとつは、室内外の融合の徹底である。もともと備わっていた日本家屋に特有の開放性は吉村によって推し進められた。その下敷きの上に超厚板ガラスによる透明な大開口が導入され、桟を消し、枠を細く、框を目立たなくして、これ以上は望めないほどの室内と庭との一体化が実現されている。庭はせまく、隣室との距離は近いので、断面の工夫や簾の活用などにより、視線は下へ下へと向かうように徹底されている。たとえば客室「栄」の寝室は東に庭を望むが、ベッドのある床面から1段大きく下がって椅子が置かれた小間があり、その窓面の下方は大きく開いているので、視線は必然的に間近の庭の情景に伸びる。欄間部分の透明ガラスからは光が入り込み、室内に外部の気配が横溢するが、中間は障子の桟を和紙で二重にくるんだ透光不透視の設えとなっていて、視線は十分に制御されている。

ふたつは、室内の拡張である。たとえば前述の「栄」では東側に土間を付け足し、客室「暁翠庵」の主室では畳敷きの外側に板敷きを広げ、その先に竹の濡れ縁をまわし、ほかにも浴室や書斎を張り出すなどしている。そうして外部との接点を増やし、あるいは内外の緩衝となる空間を豊かにしている。

3つには食寝分離である。畳敷の主室で、夕食後にテーブルや食器を片付けて寝具を整え、朝はその逆を行うという旅館に特有の方式から、附室にあたるところを寝室に確定する方式への移行である。現在3室に増えたベッド採用の室は必然的にこの方式となり、布団の室でもその方向をとりつつあるようだ。

3

花座

俵屋本館の入口の正面にある坪庭。中央の花器には四季折々の花が生けられるため、「花座」と名づけられている。

↑写真上／玄関。昔の状態が維持され、当主が「聖域」と呼ぶ場所。中／雁行して沓脱ぎに至る。下／沓脱ぎ。

古くからの書院造、数寄屋造、そして吉村順三の増築のうえに、時代に応えた改修が重ねられ、日々新しい顔も見せている。

Yoshimura Junzo

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
1

4つには書斎の設置である。書斎といっても多くは極小のアルコーブに近い。掘り込みに足を入れて座ると壁がせまり、眼前に枠どられた緑が広がる。この存在ひとつによって室内の陰翳（いんえい）の幅、居場所の多様性が一挙に増幅している。魔法のような仕掛けである。

5つには言うまでもなく設備の充実である。照明、冷暖房、テレビ、そして何よりもトイレ、洗面、風呂の水まわり。和室には必ずしもなじまないそれらの設備の高度化を、違和感を残さず、利便性を損なわずになしとげている工夫の数々は枚挙にいとまがない。改修の最大の眼目はじつはここにあるのだろう。

以上は二次元の平面図と数室の短時間の見学からの考察にすぎない。改修の実際は、段差、天井や鴨居の高さ、ディテール、仕上げ材、庭の石や植栽など、考慮すべき無数の要素があり、さらに時間の要素も加わって、多次元の緻密な立体ジグソーパズルを組み立てるような複雑な作業になる。

既存の骨格のうえで飛翔した改修

そうした改修を経て、吉村順三のオリジナルデザインが残っているのは新館の階段の手すりくらいしかないと、佐藤年さんは申し訳なさそうに言う。

けれども江戸中期に建てられた書院造が明治初年に数寄屋風に改築されたとき、書院の簡素で骨太の、風格あるたたずまいが色濃く残ったことが本館から知られるように、昭和半ばの吉村デザインの精髄は、度重なる改修を経た平成の今になっても確実に伝えられているとみえる。

室へのアプローチ、主室のレイアウト、開口の位置、水まわりの配列など、空間の大きな骨格はそれほど変わっているわけではない。「日本建築を学ぶには数寄屋から入ってはならず、まず書院を学ぶべし」と説いたと伝えられている吉村流のプロポーションや寸法は、そのままに保たれていないとしても、改修の確固とした基準になったにちがいない。揺るぎない基準があってこそ、そこからのずれを正確に測定でき、適正な判断が可能になる。

こうしてみると、「年好み」の本質は吉村デザインからの離脱ではなく、ましてその消去ではなく、節度ある変容の範囲内にあり、表面の奔放とも見える姿は、岡崎和助と吉村順三の両人の掌に安んじてこそ可能になった華やかな飛翔とみなせるのだろう。

4

客室「泉（いずみ）」

本館にある、俵屋の中で最も古い客室。2006年に改修され、土間を室内に取り込み、内外を一体化している。

5

客室「常盤（ときわ）」

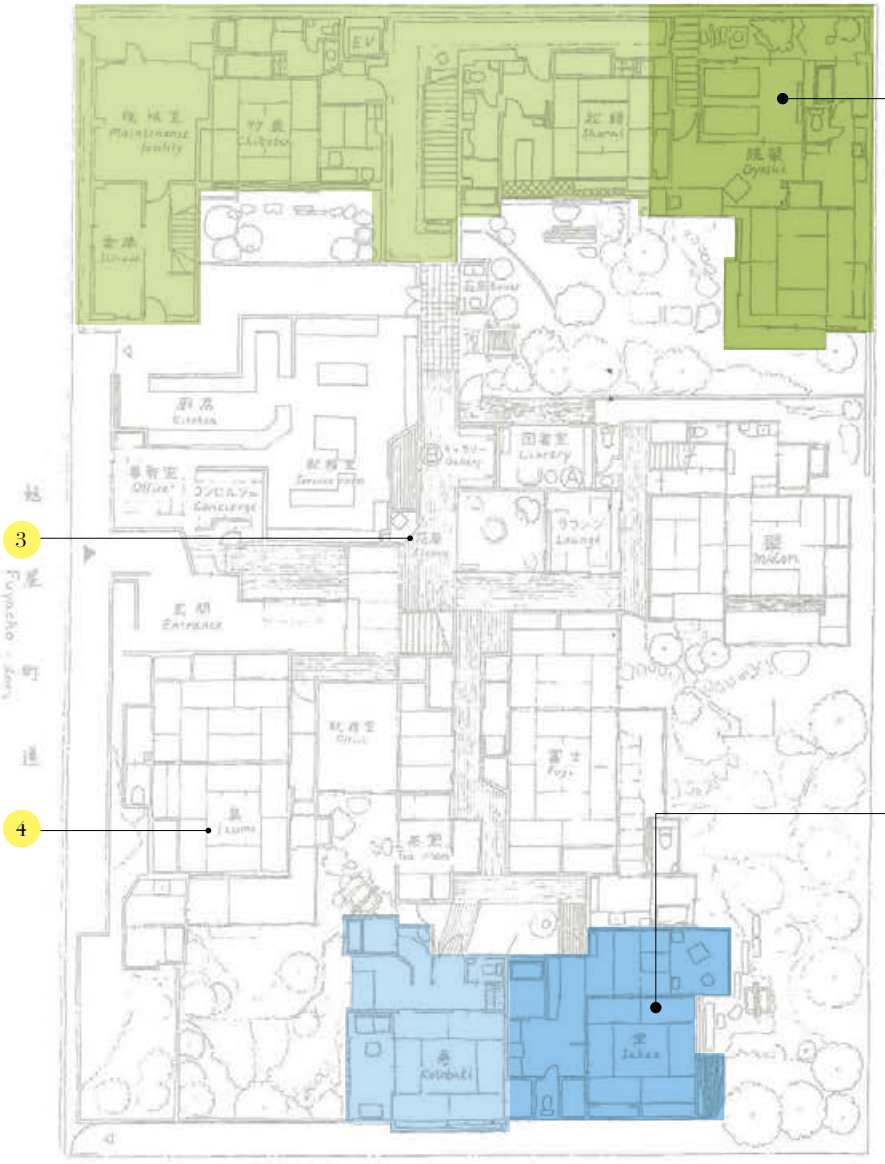
新館2階の客室。雪見障子は、框と組子の見付寸法を同じにした「吉村障子」。本館との境の緑豊かな庭が見える。

全体平面図

N 1/250

俵屋は、何度も増改築がなされてきている。青色の部分は、1958年に吉村順三の設計によって増築された部分。緑色の部分は、65年に同じく吉村によって増築された鉄筋コンクリート造の新館。

新館



本館

1F

本館増築部

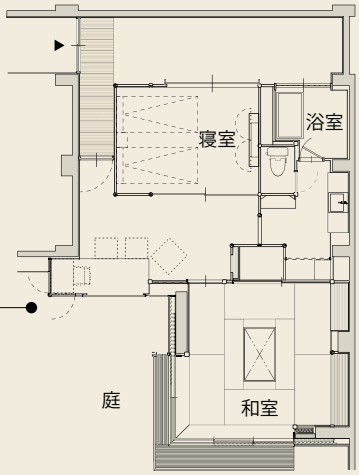
客室平面図

0 1 2m

1

暁翠庵

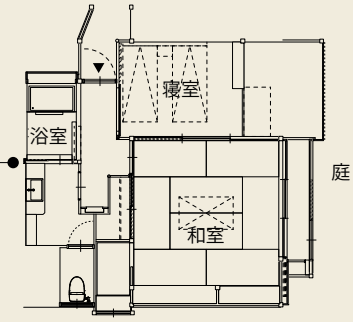
1/200



2

栄

1/200



正面外観。京都らしく、内側の豊かな空間を感じさせない、控えめで品のある外観になっている。

「俵屋」

建築概要	
所在地	京都府京都市中京区
	麩屋町通姉小路上ル
主要用途	宿泊施設
建築主	俵屋
設計（一部）	吉村順三／
	吉村設計事務所
	（新館および本館増築部）
施工	中村外二工務店
敷地面積	1,260.59㎡
建築面積	757.99㎡
延床面積	1,406.56㎡
階数	地上1階（本館増築部）、
	地上3階（新館）
構造	木造（本館増築部）
	鉄筋コンクリート造、
	一部鉄骨造（新館）
竣工	1958年（本館増築部）、
	1965年（新館）

Yoshimura Junzo

写真／門馬金昭

吉村順三

1908年東京都生まれ。31年東京美術学校（現東京藝術大学美術学部）建築科卒業。31年レーモンド建築設計事務所入所。41年吉村設計事務所設立。45年東京美術学校助教授。62年東京藝術大学建築科教授、後に名誉教授。97年逝去。
おもな作品＝「NCRビル」(62)、「軽井沢の山荘」(62)、「奈良国立博物館」(74) など。

かつて明治時代に、国家の迎賓館としてつくられたホテル。
各国の貴賓や、皇族が宿泊してきた。しかも、奈良という古都に立つ。
そこでは、やはり日本的なものがホテルにも求められた。
最初期の日本人建築家・辰野金吾は、まるで社寺のようなたたずまいのホテルをつくった。

洋の骨格に、和の意匠をちりばめる

取材・文／大井隆弘　写真／川辺明伸

Tatsuno Kingo

Endo Arata

Murano Togo

Yoshimura Junzo

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study

2

設計

辰野金吾

作品

奈良ホテル

竣工
1909

フロントデスク前（旧大広間）の吹抜けは9mほどの高さがある。サイドには廊下が伸びている。

2階からフロントデスクを見下ろす。社寺建築のような高欄が吹抜けを囲んでいる。

Tatsuno Kingo

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
2

「西の迎賓館」とまで呼ばれるホテルに泊まるのだから、できるだけ早く行って長い時間滞在したい。その気持ちはよくわかるが、奈良ホテルへは、できるだけゆっくり向かってほしい。もちろん歩いて。途中で出合う景色や建物の一つひとつを目に焼きつけるように、じっくりと。

道すがら出合う鹿と紅葉、朱の鳥居

奈良ホテルは、近鉄奈良駅の800m南東に位置する。駅を出たらまずは東へ進み、奈良県庁の手前を右に曲がってまずは奈良公園に入る。しばらく石畳を歩くと、興福寺の国宝、東金堂や五重塔にたどり着く。興福寺を堪能したら、公園の南側を東西に走る三条通に出て春日大社のほうへ。途中、菩提院の塀の前で「傳説三作石子詰之旧跡」と書かれた木標に目をやる。ここには、春日神鹿を不意にあやめてしまった三作という小僧が、掟にしたがって石子詰の刑に処され、ひとり息子を失った母が悲しんで供養し紅葉を植えた、という昔話が伝わっている。これが花札にある「鹿と紅葉」のもとになった話だと知る。

この木標を過ぎると、目の前に鮮やかな朱色をした一の鳥居が見えてくる。鳥居の左は旧帝国奈良博物館への道。鳥居の先は緑の参道が伸びていて、人と鹿が小さくな

正面外観。瓦葺きの屋根、懸魚、組み物など、外観にも社寺建築の意匠を採り入れている。

フロントデスク前から2階への大階段。天井は日本的な格天井。写真右上／高欄に取り付けられた擬宝珠。戦時中に金属が接収されたため、陶器でつくり直されたもの。右中／マントルピースと鳥居が組み合わされたデザイン。右下／近隣の春日大社にある吊灯籠をモチーフにしたシャンデリア。

1

1

大きな洋風のスケールの空間に、高欄や鳥居、吊灯籠などの和の意匠を

りながらずっと続いている。

奈良ホテルへは、鳥居の前を右に曲がる。その先はゆるやかな下り坂になっていて、荒池という大きな池が現れ視界がさっと広がる。この池の先はまた上り坂になっているが、その丘の木々の上から鴟尾（しび）をのせた瓦屋根が顔を出す。奈良ホテルである。そこは、南都一と讃えられた大乗院庭園の御殿山にあたる場所。北に荒池、南に大乗院庭園を見下ろす、最高の立地である。

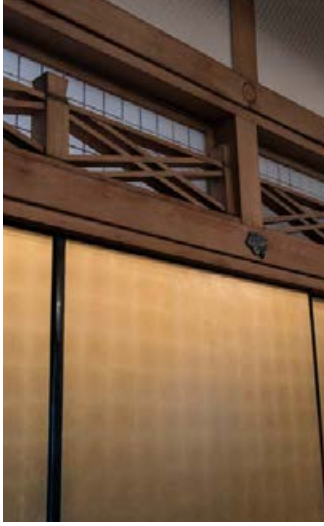
関西の迎賓館

奈良ホテルの始まりは、今から110年ほど前の1906（明治39）年。日露戦争後、訪日外国人の急増が見込まれたことから、建設資金を関西鉄道、経営を都ホテルの西村仁兵衛、地所を奈良市が提供するという覚書が結ばれて計画が動き出した。その際、奈良市は東大寺参道脇の土地を提示したが、西村が難色を示して自らこの土地を購入したのだという。

ところがその直後、鉄道各社の国有化が決定し、関西鉄道もそのひとつとなった。西村が購入した土地は国有化前に関西鉄道へ売却されたので、敷地は鉄道院の所有となって、ホテル建設も鉄道院が引き継いだ。そうした経緯があって、09年の開業時には、民間経営の外国人向けホテルから、国家を意識させる迎賓館へとその性格が変化していた。建設予算は当初想定された5万円から35万円に。鹿鳴館が18万円であったことを考えると、これは大変な金額である。当初の経営は、50以上の客室を有しながら、毎日4～5人の客を50人以上のスタッフが迎えるというもの。奈良ホテルがもつ「西

●の数字は平面図（26ページ）と対応。

時を重ねるなかで、さまざまな年輪が奈良ホテルに刻まれてきた



写真上／大食堂（現ダイニングルーム「三笠」）と中食堂（現宴会場「菊の間」）の境にある、襖の上部に取り付けられている竹の節欄間。中／大正時代になって、暖炉の代わりに導入されたスチーム暖房。下／もともと白木だったが、周囲の神社に合わせて朱に塗装された高欄。

Tatsuno Kingo

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
2

の迎賓館」という別称もうなずける。

西洋のビルディングタイプに和の意匠を

奈良ホテルの門は、池を越えてすぐの場所にある。門の先には、湾曲したゆるい上り坂がつづき、今か今かと気持ちを高ぶらせる。50mほど進んだ先が、いよいよ奈良ホテル。堂々たるたたずまいである。柱と上げ下げ窓、白漆喰がリズミカルに連続する壁面を、竪羽目の腰壁が引き締める。鴟尾をのせ、シンメトリーを強調しつつ雁行していく5つの棟。左手の1棟には、ダイニングルーム（旧大食堂）や宴会場（旧中食堂）、雁行する右手の3棟は客室群、中央棟にはフロントのほか、宿泊者のロビーラウンジ（旧迎賓室）などが入っている。豕扠首を見せる妻面は、軽快さを添えて宿泊客に重苦しさを感じさせない。手前に突き出した大きな車寄せ玄関は、左右3本ずつ柱を建て、壁を入れて長押をまわす。乳金物は、よく見ると木製。その上に皿斗、大斗、舟肘木が重なり、虹梁へつなぐ。棟先の梅鉢懸魚には日が当たり、エントランスの深さを強調している。

この奈良ホテルのたたずまいには、「旧奈良県物産陳列所」（設計：関野貞／1902）、「旧奈良県庁舎」（設計：長野宇平治／1895／現存せず）、「旧奈良県立戦捷記念図書館」（設計：橋本卯兵衛／1908／大和郡山市に移築）と、いずれも奈良公園、あるいは公園に面して建設された明治期の建物との強い連続性が感じられる。

いずれも上げ下げ窓の真壁の意匠。実際は大壁に柱梁型を張り付けている点や鴟尾をのせ小壁に貫を見せる点は「旧奈良県庁舎」と同じ。腰に竪板をまわす所は「旧奈良県物産陳列所」に似ている。西洋風の建物がもてはやされた明治期。行きすぎた欧化主義への反動がすでにあったにせよ、庁舎や図書館といった西洋のビルディングタイプが、なぜ奈良公園では和風の意匠をまとったのか。

和は「本邦建築の優点」

設計をしたのは「日本銀行本店」（1896）や「東京駅」（1914）で有名な建築家・辰野金吾。ほとんど資料が残っていないので、辰野の意図も謎のままだが、和風意匠が採用された理由を推測するには、1894年に完成した「旧帝国奈良博物館」の問題を知る必要がある。

この博物館は、赤坂の迎賓館で知られる片山東熊が設計したネオ・バロック式の洋館であるが、その姿を目の当たりにした奈良の人々は、奈良公園にはふさわしくない、と批判した。また、県議会においても「建物新築に際しては、古建築との調和を保持すべし」との決議が出されるまでに至る。その直後に設計が進められたのが「旧奈良県庁舎」で、「奈良の地は我国美術の粋とも称すべき古建築の淵叢たり世人既に似而西洋風建築に嫌厭す宜しく本邦建築の優点を採るべし」との条件がつけられた。奈良は古建築の中心地なので、日本的な建築が推奨されたのだ。この出来事と旧奈良県庁舎の建設を出発点として、和風の意匠をまとった建物が連続的に建設されていったのである。

こうした奈良の人々の決断の背景には、明治の変動のなかで仏教に圧力がかかった廃仏毀釈などによって、荒れきった古都の無残な姿への苦々しい想いがあった。あるいは、堺県、大阪府への合併によって奈良県が消えたショックも大きかっただろう。念願かなって奈良県が再設置されたのは1887年のこと。県庁舎をはじめとする建物群の建設は、奈良の人々にとってプライドにかかわる大問題だったのだ。単に和風が採用されたのではない。人々の意志で景観に規制がかけられたのだ。こうした経緯を踏まえると、鴟尾や貫が東大寺大仏殿を特徴付ける要素であったり、春日大社のあちらこちらで豕扠首が見られたりすることにも、大きな意味があるように思えてくる。つまり、「本邦建築の優点」が奈良公園一帯の社寺に重ねられたのではないか。

奈良公園のブリコラージュ

それを確かめに、ホテルへ入ろう。大きな車寄せ玄関から2畳ほどの風除室を抜けると、フロントは9mの吹抜け空間。支輪を模したカーブで縁取られた吹抜けが、天井の高さをより強調している。その目線の先には吊灯籠をモチーフとしたシャンデリアが下がる。よく見ると側面には紅葉が刻まれている。吊灯籠のシャンデリアは、大食堂や客室の一部にも。また、暖炉のマントルピースを覆う朱色の鳥居も目を引く。吊灯籠といえば春日大社である。暖炉の鳥居にも先ほど見た一の鳥居との連続性を感じる。

フロントの先へ進むと、今度はバー入口の欄間に興福寺の五重塔と東大寺の鐘楼をモチーフにしたエッチングガラスを見つける。バーやロビーに入れば、木々の向こうに荒池が、運がよければ紅葉と鹿の組み合わせも。対岸には興福寺があり、大階段を上がれば東大寺大仏殿の鴟尾が見える。この地に伝わる物語や歴史が風景とともに展開していく。奈良公園一帯の印象的な要素がブリコラージュされているようだ。

この空間は、誰が手がけたのか。先述のとおり、奈良ホテルの基本設計は辰野金吾が手がけたが、現場監理は当時ホテル建築の経験をもち、辰野の工部大学校（現東京大学工学部）での後輩にあたる建築家・河合浩蔵が引き継ぎ、担当したといわれている。しかし、実施設計を誰が行ったのかは今のところはっきりわかっていない。もちろん、建設主体となった鉄道院の影響は強く感じられる。たとえば、車寄せ玄関のたたずまいは、じつのところ関西鉄道とともに国有化された京都鉄道の二条駅によく似ている。

当時は、貴賓客に応じて改修や照明の新調がされたこともあるというから、年代も設計者もそれぞれ違うのかもしれない。その詳細は、戦後の混乱のなかで多くの資料が失われたため、建築的には不明な点も多いのだという。

ただ、それでホテルの歴史的価値が損なわれるわけではない。奈良の人々の復興への想いは、「本邦建築の優点」を奈良公園一帯に重ねさせた。奈良ホテルは、和風をまとった一連の建物からそれをしっかり引き継いで、歴史に自らを刻む。この建築はブリコラージュの手法をもって、その重みを人々に語りかける。

だからこそ、ゆっくり歩いて向かいたい。ホテルからのメッセージがあるのだ。100年を超えてなお生きつづけるホテルの秘密が、そんなところにあるように思えた。

写真右／もともと共同の浴室、トイレだった離れを、客室として改修したパークサイドツインルーム。

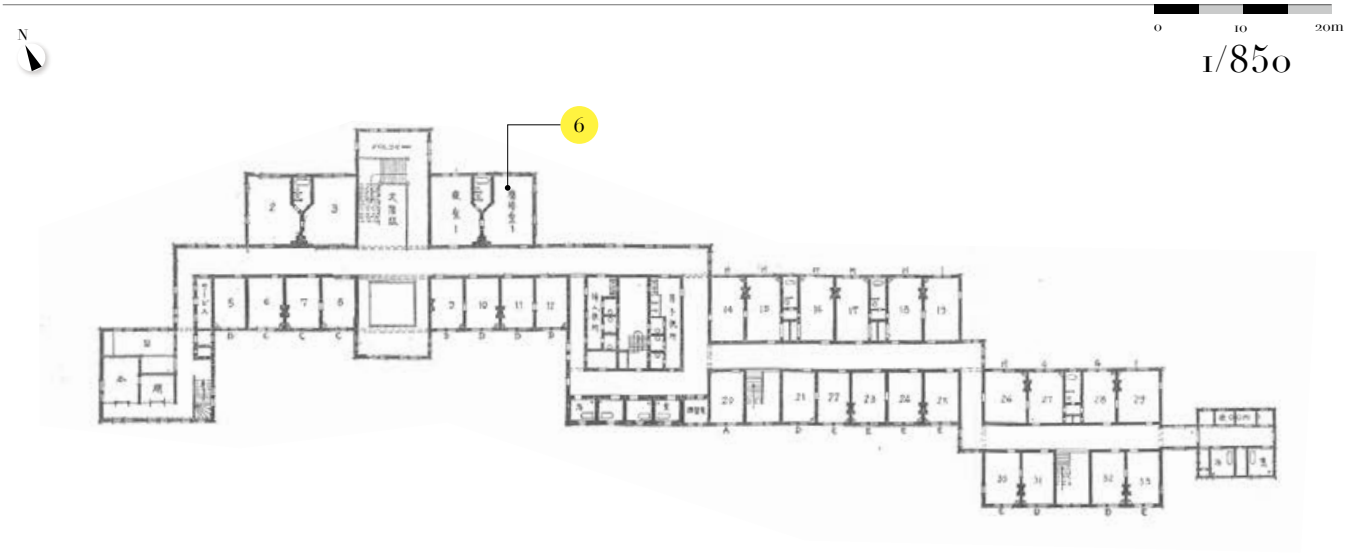
3

2

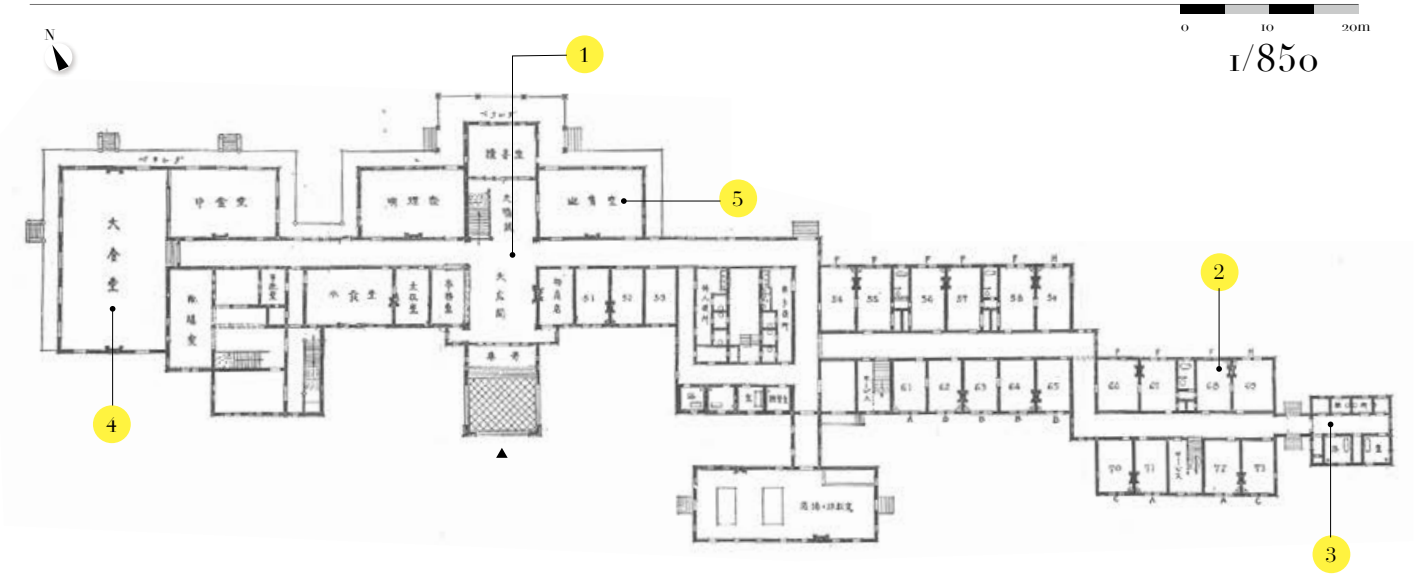
本館スタンダードツインルーム。共用部と同じく4mほどの高い天井。時折、奈良公園の鹿が、客室の窓の近くまで来る。

↓写真右／客室前の廊下。中／本館スタンダードツインルームの浴室。廊下や客室と同じく天井が高くなっている。左／パークサイドツインルームの浴室。水まわりも改修されている。

2階平面図（竣工時）



1階平面図（竣工時）



5

写真右／大食堂（現ダイニングルーム「三笠」）。二重の長押と格天井、シャンデリアなどの意匠が組み合わされている。外周部には緑に面した席。左／フロントデスクの脇にある迎賓室（現ロビーラウンジ「桜の間」）。

4

北東の荒池越しに見た外観。まるで旅館のように見えるたたずまい。

6

↑皇室や国賓の宿泊所として供されるインペリアルスイート。1990年に改修された（提供／奈良ホテル）。

↓大食堂（現ダイニングルーム「三笠」）から奈良の風景を見渡せる。遠くに興福寺五重塔が見える。

4

「奈良ホテル」

建築概要	
所在地	奈良県奈良市高畑町
主要用途	宿泊施設
建築主	鉄道院
設計	辰野金吾+片岡安／ 辰野・片岡建築事務所 河合浩蔵（現場監理）
施工	直営
敷地面積	21,618㎡
建築面積	3,523㎡（新館含む）
延床面積	12,532㎡（新館含む）
階数	地上2階（本館）
構造	木造（本館）
竣工	1909年

出典／国立国会図書館ウェブサイト「近代日本人の肖像」

Tatsuno Kingo

辰野金吾

1854年佐賀県（唐津城下裏坊主町）生まれ。73年工部省工学寮（後の工部大学校）の第1回生として入学。77年に着任したジョサイア・コンドルに学ぶ。79年工部大学校造家学科（現東京大学工学部建築学科）を卒業。84年工部大学校教授。1903年東京に辰野・葛西建築事務所、05年大阪に辰野・片岡建築事務所を開設。19年逝去。
おもな作品＝「日本銀行本店」(1896)、「旧松本家住宅」(1911)、「東京駅」(14)。

F.L.ライトが設計した帝国ホテルが竣工してから7年後、関西に甲子園ホテルが完成した。
弟子の遠藤新が設計を行い、ライト様式を継承しつつも、
和室をつくるなど、独自性もある。今は大学の教育施設になっているが、
古写真や古図面をたよりに、かつての甲子園ホテルを読み解いた。

西の帝国ホテルで、和洋のミックスに挑んだ

取材・文／杉前政樹　写真／山田新治郎

Endo Arata

Murano Togo

Yoshimura Junzo

Tatsuno Kingo

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study

3

設計

遠藤 新

作品

旧甲子園ホテル

竣工
1930

南側外観。現在、旧甲子園ホテルは「甲子園会館」として、武庫川女子大学の施設になっている。

「西の帝国ホテル」といわれる、フランク・ロイド・ライトのスタイルを受け継いだ外観

写真上／煙突の塔。建物の凹凸に加え、庇や装飾の陰影もあり、彫りの深いデザインになっている。中上／外壁に貼られた立体的なタイル。中下／バンケットホール（現西ホール）の装飾。下／バンケットホール（現西ホール）入口の装飾。打ち出の小槌は、旧甲子園ホテルのマークだった。

Endo Arata

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
3

甲子園といえば、球場。高校球児の聖地であり、阪神タイガースの本拠地として、どちらかというと庶民的なイメージが強い地名だが、この地では昭和初期に、「西の帝国ホテル」と呼ばれた瀟洒（しょうしゃ）なホテルが運営されていた。一帯はもともと武庫川の支流であったが、これを埋め立てた河川跡地を阪神電鉄が購入し、郊外住宅とレジャー施設用地として開発が始まった。河口付近では1924年に甲子園球場、26年にテニスコートが完成、そして武庫川との分岐点辺りの松林が広がる景勝地に30年に建てられたのが「甲子園ホテル」であった。

当時はまだプロ野球もなく、野球はゴルフやテニスと同じく、外国文化のかおりがする憧れのスポーツのひとつであり、「甲子園」とはまさに、阪神間モダニズム文化を象徴する響きをもっていたにちがいない。週末にレジャー施設を楽しむ裕福な階層向けに、あるいは東京や海外からの要人やスポーツ選手の迎賓館として、このホテルは関西財界人からの要請をうけて計画された。

支配人に迎えられたのは林愛作。帝国ホテル支配人として、フランク・ロイド・ライトに設計を依頼したものの、度重なる工事遅延と予算超過もあって、建設途中で退職を余儀なくされた身であった。再起を賭ける林が設計者として選んだのは、遠藤新。ライトのもとで帝国ホテルの設計・施工をサポートした愛弟子である。つまり帝国ホテルの現場で苦楽をともにしたふたりが、新たな理想のホテルづくりに挑戦したのが、このプロジェクトであった。

ホテルで日本旅館のサービスを

建物の外観は明らかにライトの強い影響がみられる。壁面のボーダータイル、軒の水平線を強調したデザイン、幾何学模様のテラコッタ、大谷石に似た日華石（石川県小松市産）を使った外壁と美しいレリーフ彫刻。ライトの設計といわれても納得してしまいそうである。だが平面図を比較すると、師との差異が明らかになってくる。帝国ホテルは80m以上もある中廊下の両側に客室が並び、現在のホテルでもよく見られるプランだが、甲子園ホテルは十字型の客室棟をふたつつなげたような特殊な形状をしている。十字の交点部分には、煙突や暖房設備、エレベータや階段などが集約され、客室までの廊下が10m程度と短くすむように計画されているのだ。

遠藤はホテル設計の経緯を『婦人之友』にこう記している。まず林の意見として、日本の旅館ほどすぐれたサービスは、世界中どこにもない。しかし一方で戸締まりはできず、隣室に音は筒抜けで寝具も悪く、設備においてはホテルに大きく劣るという。それならば、西洋の施設に日本のサービスを加えたホテルができないか。この林の考えから設計が始まったという。彼が理想とするホテルの部屋は八畳の和室と十畳の洋室を合わせたもの。こうして西洋式ホテルとしては日本で初めて、和室のあるスイートルームが誕生した。

バルコニーの張り出した南面。石積み（日華石）の装飾のある支柱で庇が張り出している。左手の瓦葺きの部分が元客室。右手はラウンジなどのパブリックスペース。

装飾的な瓦屋根。軒先の雨どい（日華石）にも装飾が施されている。厚い雨どいとのバランスからか、軒先の瓦が二重になっている。

ライト様式の内側に遠藤新が抱いた理想

この和洋ミックスのスイートがどのような空間であったかは、客室が現存しないため写真から想像するしかない。内観パースやモノクロ写真を見る限り、日本人には使いやすく、心落ち着ける空間だったのではないだろうか。とりわけファミリーでの滞在となれば、子どもの添い寝や婦人の着物着付けなど、和室のほうが使い勝手がよい場面も多かったにちがいない。

また4階には和室だけの部屋があり、部分的に現存している。ここはすき焼きを出す部屋として使われていたという。もちろん外国人観光客を喜ばせる空間なのだが、日本人にとっても、ご馳走をいただくハレの場所となった。ひたすら西洋化を目指す時代は終わり、高級ホテルも和室のよさを再認識して取り入れる時代となった。この流れは後に、ホテル内での数寄屋建築の系譜へとつながっていく。

遠藤は、単にホテル内に和室を組み入れるにとどまらず、プランにおいて部屋と部屋のつながりを重視していた。遠藤が理想とする住宅は、彼が生まれ育った東北の農家のように、家の中心に囲炉裏があり、すべての部屋がそこにつながるものであった。ゆえに住宅を設計する際、遠藤は廊下を極力短くしたという。彼にとって、長い廊下で部屋が画一的に区切られた空間は好ましくないものであり、ホテルの場合もそれは例外ではなかった。

林式の和洋併用スタイルと遠藤式のアットホームで求心的な空間構成。この両者があいまって、甲子園ホテル独特の客室配置が生まれた。外観はライトの様式にならっていても、その内部空間に関しては、遠藤は確固とした理想を抱きつづけていたのだ。

時代の閉塞感と旅館に受け継がれた遺産

いよいよホテルが完成となり、遠藤が図面と写真をライトに送ったところ、内装家具などいくつかの難点を示しつつも、「見事なお手並みです」と激励する手紙が送られてきたという。

こうして、鳴り物入りで誕生した甲子園ホテルは、高松宮夫妻や東久邇宮、ベーブ・ルース、谷崎潤一郎や原節子など数多くの著名人が利用したが、その一方で経営は必ずしも順調とはいえなかったようである。開業した翌年の31年に満州事変が起こり、暗く閉塞した時代に突入していくなかで、客足はあまり伸びず、1階の客室は理髪店などの店舗に転用されている。林はここでも理想のホテルの実現にはほど遠いと思ったのか、早々と支配人を辞めている。やがて44年、海軍の病院として接収されてしまう。わずか14年での幕引きであった。

戦後は進駐軍の将校宿舎になり、米軍の引き揚げ後も大蔵省管轄下で放置され、建物には悲運が続く。だが65年に武庫川女子大学に払い下げられると、少しずつ修復や耐震改修などが重ねられ、2006年からは同大学の建築学科キャンパスとしてみごとに再生活用された。設計を学ぶ学生にとって、これ以上ない環境を提供している。

建物は教育施設として残ったが、客室は教室などに改造され、宿泊空間としての甲子園ホテルは、今は跡形もない。では林と遠藤が合作した理想の宿泊空間は、時代とともに消え去ってしまったのだろうか。

じつは甲子園ホテル開業の2年後、遠藤は信州の戸倉温泉で笹屋ホテルという和風リゾートホテルを設計している。ここで遠藤は、和室の奥の縁側部分の「板の間」スペースにソファセットを置いた。今や全国どこでも、観光旅館の定番となっているスタイルの間取りだが、意外なことに、元をたどれば笹屋ホテルにたどり着くという。ここでは予算の制約上、甲子園ホテルのような贅をつくした和洋併用の客室は設計できなかったため、遠藤は予算に合わせて「洋室」の部分をごく小さな「板の間」で代用した。ところが皮肉なことに、これが和風旅館にどんどん組み込まれてスタンダードな間取りとなっていくのである。

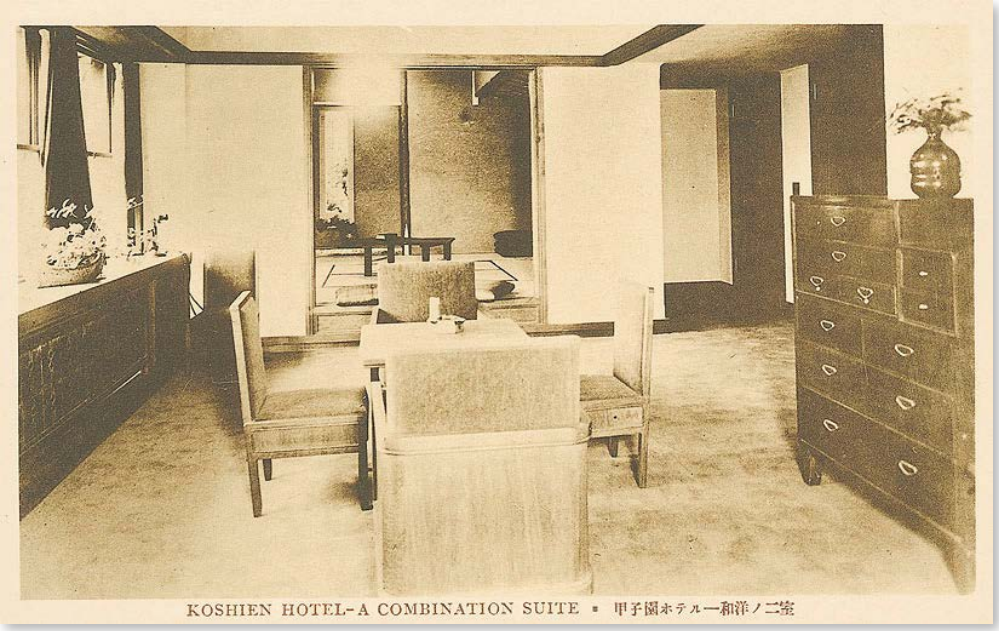
甲子園ホテルは、ライトの設計思想を受け継ぐ建築ということのみならず、日本のホテル空間の変遷を考えるうえでも重要な役割を担っているのである。

1 グリル（現スタジオ）の天井。ライト風の幾何学的な模様が描かれている。

2 4階の客室。和室のみの部屋。現在も、当時のホテルの状態を保っている。

3 バンケットホール（現西ホール）。独特の天井まわりの装飾や、市松状に和紙を貼った照明が特徴。

椅子座の洋室と床座の和室とを並べ、和洋をミックスさせる



旧甲子園ホテルの客室内部の古写真。「和洋ノ二室」とあるとおり、手前に洋室、奥に和室（提供／甲子園会館）。

遠藤新による客室のスケッチ。椅子座と床座の目線の高さを合わせるためか、和室の床が少し高くなっている（提供／遠藤現建築創作所）。

Endo Arata

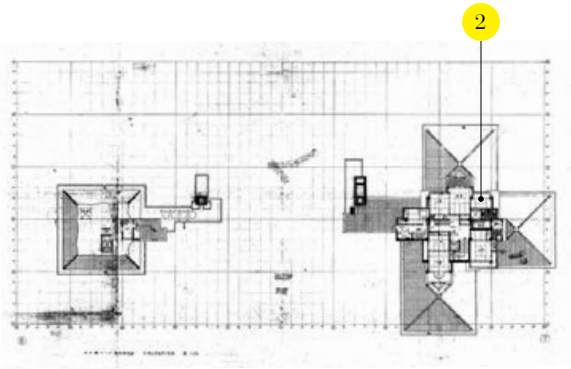
Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
3

平面図(竣工時)

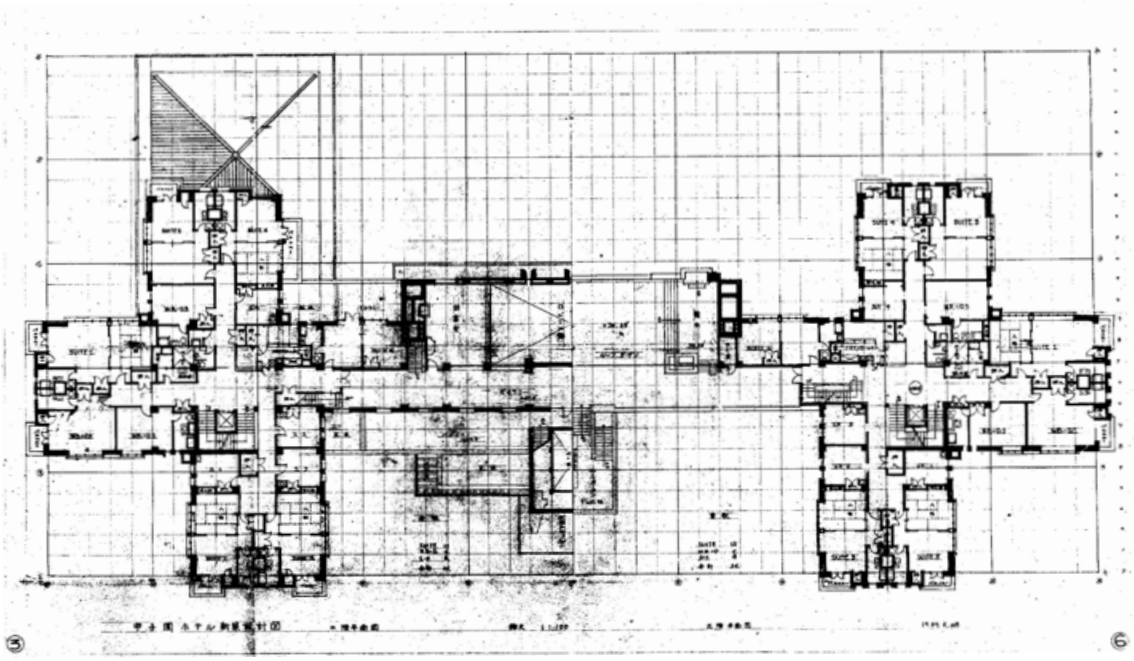
0　5　10m

N 1/650

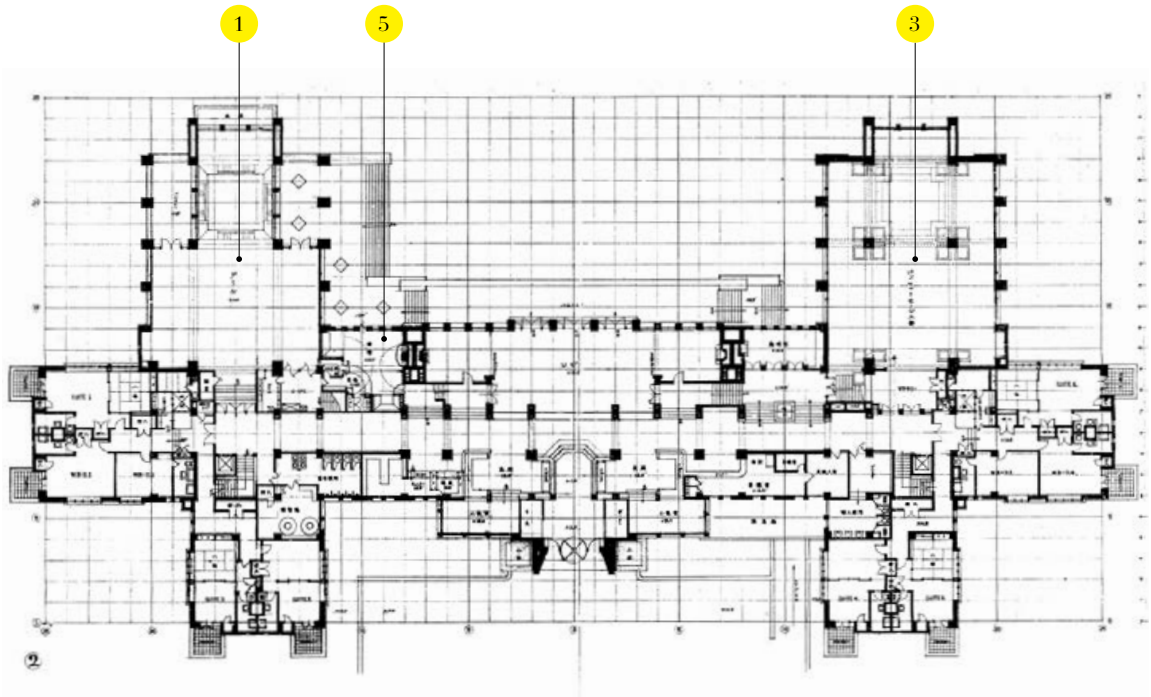
竣工時の旧甲子園ホテルの図面。東西のウイングに客室が配されている。各ウイングの客室は風車状に配され、動線が短くなるように工夫されている。



4 F



2 - 3 F



1 F

北側外観。玄関はこの北側にある。正面の屋根はルーフガーデンになっている。

「旧甲子園ホテル」
（現武庫川女子大学甲子園会館）

建築概要	
所在地	兵庫県西宮市戸崎町
主要用途	宿泊施設（現在は教育施設）
建築主	阪神電鉄（現在は武庫川学院）
設計	遠藤新／遠藤新建築創作所
	（改修設計は
	遠藤楽、竹中工務店、大林組）
施工	大林組
	（改修施工は竹中工務店、大林組）
敷地面積	37,240㎡
建築面積	2,248㎡
延床面積	6,172㎡
階数	地下1階、地上4階、塔屋1階
構造	鉄筋コンクリート造
竣工	1930年

Endo Arata

提供／遠藤現建築創作所

遠藤 新

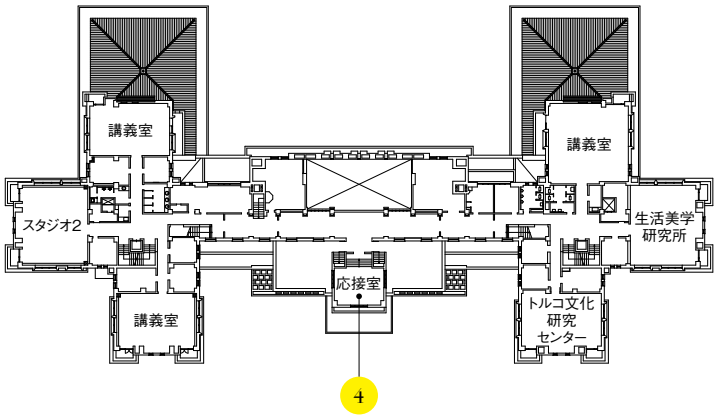
1889年福島県生まれ。1914年東京帝国大学工科大学建築学科（現東京大学工学部建築学科）卒業。15年明治神宮造営局勤務。17年ライトと出会い、ともに帝国ホテルの設計・建設に従事（チーフアシスタント）。22年遠藤南建築創作所設立。51年逝去。おもな作品＝「加地利夫別邸」(28)、「笹屋ホテル」(32)、「目白ヶ丘教会」(50)。

平面図（現在）

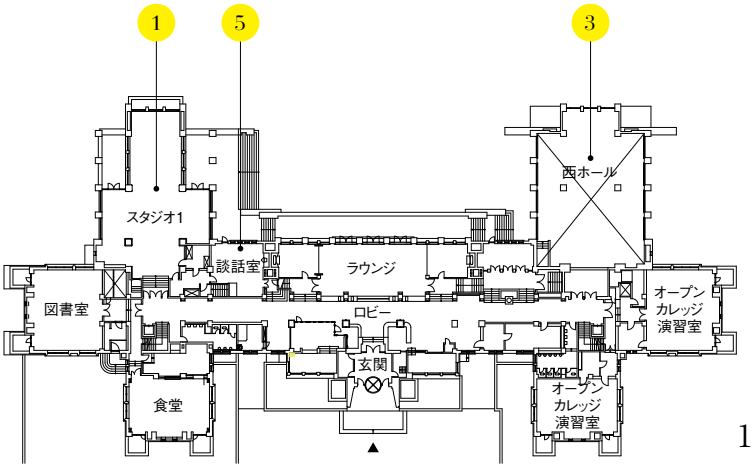
0　5　10m

N　1/1,000

旧甲子園ホテルは、1965年に武庫川女子大学の教育施設「甲子園会館」になり、65年、91年、2006年に大改修された。客室部分は、講義室やスタジオに生まれ変わっている。



2F



1F

3階の講義室。4室の客室分のスペースが、教育施設になるにあたって転用された。

5

1階談話室。酒場だったスペースが転用された。暖炉や床材は当時のまま。

玄関の上にある2階の応接室。特徴的な半円形の窓が、北側正面ファサードの顔にもなっている。

4

数々のホテルや旅館を設計してきた建築家・村野藤吾。
「建築は社会のもの」という考えを実践し、
建築家がもつ、あふれる感性や技術を、ホテルのためにいかんなく発揮している。
建築のためのスタイルというより、むしろホテルのためのスタイルが、村野建築の特徴だろう。

ホテルを躍動させる、村野藤吾のディテール

取材・文／本橋 仁　写真／山内紀人

Murano Togo

Yoshimura Junzo

Tatsuno Kingo

Endo Arata

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study

4

設計

村野藤吾

作品

ザ・プリンス 箱根芦ノ湖

竣工

1978

本館２階のロビー。天井や壁柱のアクリル製ショーケースなどのディテールが見どころ。

↑芦ノ湖に面している円形平面の客室棟。有機的な造形のデザインが、周囲の豊かな自然と呼応している。

Murano Togo

Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
4

身だしなみは足元から。よく、ファッションの言葉として聞くものだ。目に見えないところにも注意しなければ、折角のおしゃれも台なしだぞ、という意味で用いられる言葉である。建築家・村野藤吾は、その繊細なディテールで知られる建築家であるが、その繊細さを支えたのは、そうした見えないような細部までの徹底したこだわりである。

ザ・プリンス箱根芦ノ湖（竣工時の名称は、箱根プリンスホテル）は、その自然の美しさとあいまって、竣工からおよそ40年近くにわたり、多くの宿泊者を魅了してきた。この建物の魅力を、足元を手がかりにみていこう。

凝縮された足元空間

ホテルを訪れるゲストは、まず深く低い軒のエントランス（43ページ）に出迎えられる。そこにきらびやかな装飾はない。このホテルは、大きく3つの建物からなる。エントランスとラウンジ、またバーをもつ玄関としての建物、さらに中庭をもつ円形のふたつの客室棟である。そして、そのあいだをつなぐのがロビーである。

エントランスから客室へと案内されるゲストは、まずロビーを通ることとなる。そして、先ほどのエントランスで感じた印象は、この空間でガラリと変わる。おおきな曲面を描いて上に巻き上がる木の天井は、支える柱とも縁が切られているためか、まるで天蓋のように重さを感じさせない。ソファやテーブルも、この空間には道を譲り、柱と柱の影にひっそりと身を潜めている。客室棟に向かう階段も、普通であれば高揚

↑客室棟のディテール。バルコニーの障壁や雨どいなども有機的な意匠。→ロビーを短手方向に見る。座面の低い「スワンチェア」が、ロビーをより広く感じさせる。

自然に負けない有機性が、自然との調和を生んでいる

1

感のある昇り階段がありそうなものだが、ここでは敷地にそって高まる気分を鎮めさせるかのように、下る階段が用意されている。だからロビーは、このぜいたくな空気で占められている。

この空間が維持されてきたのも、ホテルの努力による。竣工当時の魅力を損なわぬよう改修が重ねられてきた。それは、建築はもちろんのこと家具にもおよぶ。建築にとって、家具もまた建築の魅力を相乗的に高める大事な要素であることはいうまでもないが、このホテルでも村野がロビーのために設計した椅子が、今なお現役で大事に使われている。

この椅子は、「スワンチェア」と名前がつき、一般に販売もされている。その特徴は、低い座面である。座面の高さはなんと、320㎜しかない。それなのに背もたれは、普通の椅子と同じく400㎜の高さがとられているものだから、なんだか全体として見るとニョキッとした印象を受ける。なぜ、ここまで座面が低いのか。

その効果を案内してくれたホテルマンが教えてくれた。「ここに座ると、ロビーの空間がより広く感じるんです」と。なるほど、確かに視線が低くなれば自然と天井は高く見える。視覚効果として、とても大きな空気が天井までゆったりと広がっているように見える。

 ●の数字は平面図（42〜43ページ）と対応。

しかし一方でこうした設計をすると、視点の低い足元に目が行きがちだ。そこで、村野はインド砂岩を塗り込んだ落ち着いた風合いの柱に、光る粒のようなショーケースを配置している。この空間を彩る、タイルの床、砂岩の柱にショーケース、そして家具。それぞれの要素が視点の低い位置に配されているため、座ってみたときにぐっと凝縮された空間を感じることができるのだ。村野は、建築のまさに「足元」にもこだわっていた。

ディテールは力学上の表現

ところで、村野藤吾の建築と聞けば何を思い浮かべるだろう。「千代田生命本社ビル（現目黒区総合庁舎）」（1966）の優雅な曲線階段や、「日生劇場」（63）のアコヤガイがちりばめられた天井、はたまた「世界平和記念聖堂」（54）の肌理（きめ）の粗い壁の仕上げだろうか。いずれにせよ村野は、多様な材料の使い手として同世代のモダニズムの建築家とは、ちょっと違った地位を築いた。それは彼の出自に関係するかもしれない。村野は、佐賀県唐津市で生まれ、八幡市（現北九州市）で育つ。そこから一度、八幡製鉄所に就職し工場で製鉄の現場に立つ。村野は後年、製鉄所で職人がスチームエンジンを勘ひとつで動かす様子を見たこと、それが自分の建築家としての出発点であったと語っている。材料を自らの手で扱った経験が、彼の材料への深い理解につながったのだろう。

このホテルにも、エントランスの横にひとつ、また主宴会場へ至るところにも、曲線階段が取り付けられている。例にもれず優雅な階段であるが、それを際立たせるのが、手すりだろう。この手すりの優雅さは、そのディテールが生んでいる。村野は、ディテールを「力学上の表現」であるといい、部材同士がぶつかり合わないように共存させることで、建築で生活する人の心もまたなごませ、とげとげしささえなくさせるのだ、と語っている。そうした一見すると気づかない部分への気配りの集積が、あの巧

2

本館2階エントランスから1階へ下りる階段室。写真左／1階からグランドフロアの主宴会場へ下りる階段室。ゆるやかな曲線の手すりが、印象的なデザイン。

3

4

←主宴会場の壁際にある間接照明。曲面がつくり出すアルコーブが、陰影の表情を生み出している。

↓写真右／エントランス側から見て左手の客室棟にあるレストラン「なだ万雅殿」。左／右手の客室棟にあるレストラン「ル・トリアノン」。いずれも円弧状の平面。

5

6

みで繊細な手すりをつくり上げている。

意図された高さと広がり

さて、座面の低い椅子が置かれているのは、ロビーだけではない。レストランに置かれた椅子もまた、すべて低い。なぜ、ここまで天井を高く見せることにこだわったのだろうか。それは、このホテルの立地に起因するものだろう。このホテルは国立公園内に立地する。つまり、無闇やたらと改修や新しい建物をつくることができない場所だ。もちろん、商業施設として障壁ともなろうがその分、それにより守られる自然こそがこのホテル最大の資源でもある。村野もまた、自然と建築をいかに融合させるかに、このホテルでは苦心をしている。たとえば客室棟は、ふたつの円形の建物に分かれているが、この敷地は新しく地形を造成するのではなく、すでにあった自然の地形をできる限り利用している。

客室棟は、全部で96室（現在は91室、別館が43室）であるが、ちょうど半分に分けて収めてある。それにレストランと会議室など、必要な要素がぴたりと納まり、まわりの木々に埋もれるほどの低い建物を実現している。しかし窮屈さを感じさせないのは、やはりこの低い椅子のおかげだろう。天井の低い廊下から、吹き抜けたレストランに入ると、その向こうには芦ノ湖が見える自然の風景が広がっており、思わず深呼吸したくなる。

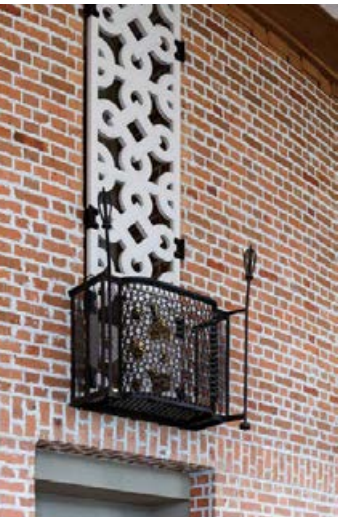
もちろん客室にも、そうした工夫がある。しかしこちらは、ロビーやレストランが高さへの演出であるとすれば、水平への広がりといってよい。ロビーを抜け、客室棟に入ると中庭に突き当たる。竣工当時から植えられている竹が、視点を高いほうへと向かわせる。客室にたどり着き扉を開けると、浴室とクロゼットに一度、視界をさえぎられる。歩みを進め、その向こう側に抜けるとバルコニー越しの芦ノ湖を、さらには向こう側の山並みを見渡すことができる。こうした高さや広がりを巧みに操りながら、設計の制約をまったく感じさせない空間の演出が、客室にまでおよんでいる。

村野の作品ではなく村野の関係した作品

村野は、商業施設から公共施設、個人住宅から茶室に至るまで、本当に幅広い建築を残した。そしてザ・プリンス箱根芦ノ湖のように、建てられた当時の美しさをとどめながら、大事に使われているものも多い。それは建築家としての姿勢が、施主への共感を生むものだったからだろう。

村野は晩年まで、建築家は徹底して謙虚でなくてはならない、そう述べていた。資本主義のなかで、建築は勘定できる資本であり、たとえば銀行であれば預金、公共施設であれば税金が使われるのであるから、現代の建築は社会のものなのだ、という認識をつねにもっていた。それゆえに、「村野の作品ではなく、村野の関係した作品」であり、たまたま関係しただけの話であり、作品はやはり社会のものなのだ。そうした態度は、決してニヒルな気持ちから来るものではない。彼は続けてこう語る。「だから社会の人にたいして建築を大事にしなさい、愛しなさい、傷つけてはいけない、ということがいえる。それは村野を生かすためじゃないでしょ。建築自身を生かすためのものじゃないかと思います」（『新建築』1980年1月号）と。

インテリア、照明そして家具も、建築と一体化して空間を演出している



写真上／レストラン「なだ万雅殿」の馬をモチーフとしたペンダントライト。中上／レストラン「なだ万雅殿」のレンガ貼りの内壁とスチール製バルコニー。中下／レストラン「ル・トリアノン」の人面の装飾が付いているペンダントライト。下／レストラン「ル・トリアノン」のインド砂岩の内壁と絵付けタイルのバルコニー。

Murano Togo

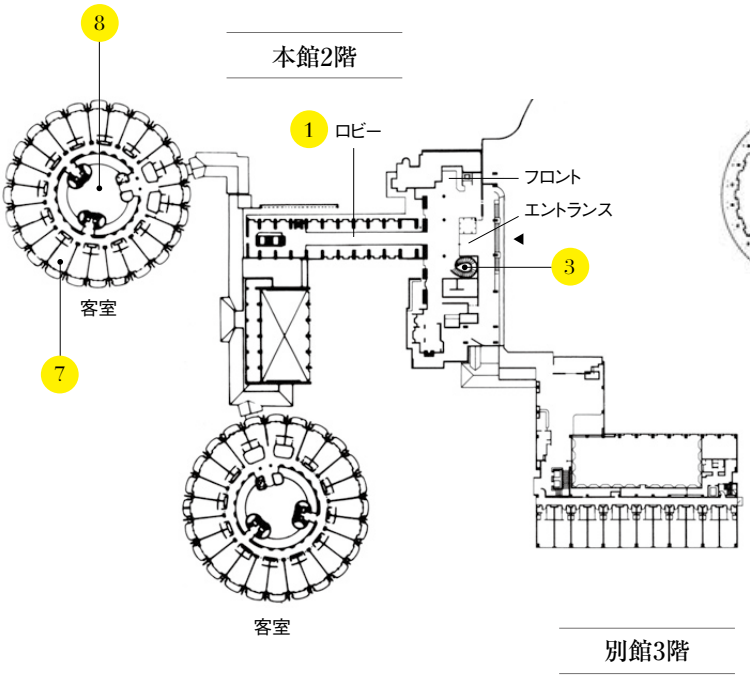
Special Feature
Architects' Hospitality
Case Study
4

本館2階平面図

N

0　20　40m

1/2,000

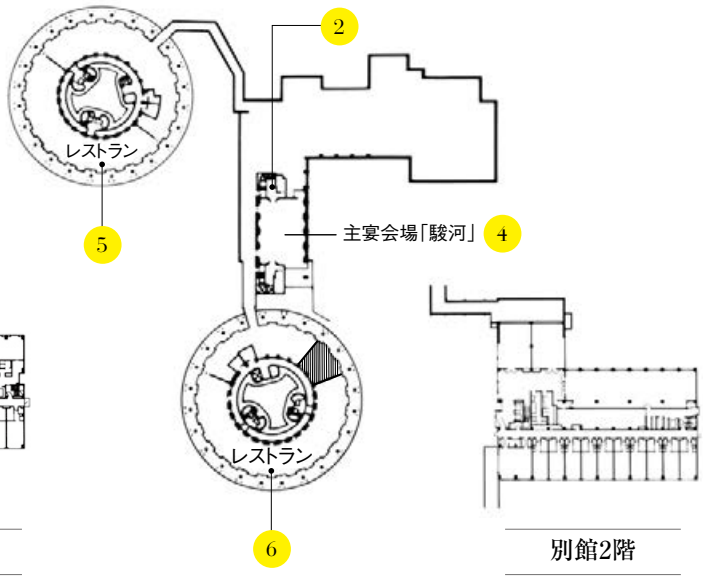


本館グランドフロア平面図

N

0　20　40m

1/2,000



客室の水まわり。曲線の洗面カウンターは竣工当時からのオリジナル。カウンター側面にティッシュペーパーが組み込まれている。

客室のベッドまわり。客室棟は円形平面のため、場所によって芦ノ湖、富士山などの異なる景色を眺めることができる。

7

正面エントランス。軒が深く、屋根が低くおさえられた控えめなたたずまいになっている。

「ザ・プリンス 箱根芦ノ湖」

建築概要	
所在地	神奈川県足柄下郡箱根町元箱根
主要用途	宿泊施設
建築主	プリンスホテル
設計	村野藤吾／村野・森建築事務所
施工	清水建設
敷地面積	40,900.00㎡
建築面積	5,988.39㎡
延床面積	14,058.74㎡
階数	地下2階、地上2階、塔屋1階
構造	鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造
竣工	1978年

提供／MURANO design

Murano Togo

村野藤吾

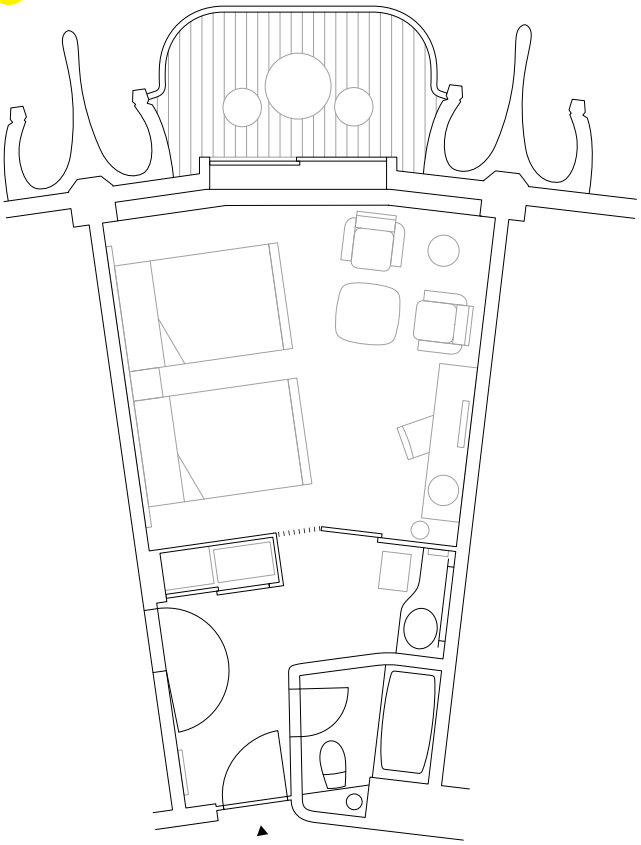
1891年佐賀県唐津市に生まれる。1918年早稲田大学理工学部建築学科卒業後、渡邊節建築事務所入所。29年村野建築事務所（後に村野・森建築事務所）開設。84年逝去。ホテル、劇場、商業施設、事務所、そして和風建築など、関西を中心にさまざまな建築を手がけた。おもな作品＝「世界平和記念聖堂」(54)、「日生劇場」(63)、「谷村美術館」(83)。

客室平面図

0　1　2m

1/100

7



↓写真右／客室棟の中央にある竹の植えられた中庭。左／手すりのデザインが特徴的な客室のバルコニー。

7

8

旅のバスルーム

文・スケッチ　浦 一也

ザ・アッパー・ハウス

中華人民共和国・香港

竹とライムストーンのミニマルデザイン

連載100回目だそうだ。はじめの頃は三日坊主になるかなと思っていたのだが23年間よく続いた。みなさまのおかげです。

今回は建築家やデザイナーに人気がある香港のザ・アッパー・ハウス。デザインはあのアンドレ・フー(＊)。

2009年竣工。香港島側の高級ホテルが多いパシフィック・プレイスのなか、JWマリオットと同じビルに入っている。

客室は117室。ストゥーディオ70、ストゥーディオ80、アッパースイート、ペントハウスの4タイプあるが、ストゥーディオ70のハーバー・ビュー側に投宿。68㎡とうたわれている。料金はやや高額だが、その価値は十分にある。パブリックは縦格子を多く使っていてソフィスティケートされた日本的な印象。フロント・レセプションは小さく、そこから6階まで異次元に上るようなエスカレータで導かれる。

この部屋は46階の2ベイを使っていて1ベイは水まわりとワードローブなどドレッシング関連だけ。バスタブは部屋の真ん中にあってビューがすばらしい。洗面台からもミラーのあいだに外が見え、全体がオープンに近い。パウダーコーナーのデスクの上、化粧鏡は照明が入っていて動くのがおもしろい。クロゼットにヨガマットがあるのを見つけた。

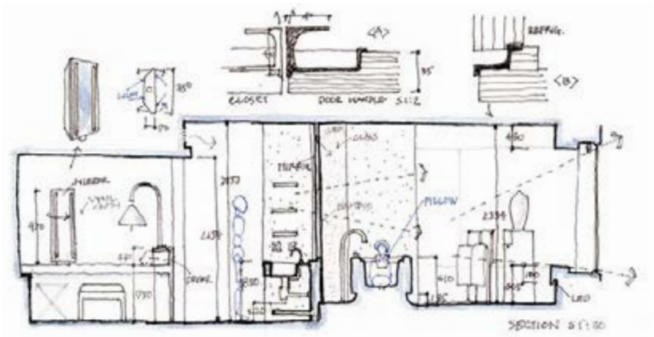
もうひとつのベイはベッドとソファ、バー、ライティングデスクなど就寝とパーラーゾーン。ワインセラーにあるたくさんのドリンク類はすべてフリーチャージ。大きな窓からハーバーや対岸の九龍半島にある高さ494mの超高層「環球貿易廣場」ビルを望んでいると時を忘れる。

機能をふたつのゾーンに分け、ビューとテレビの軸線を根拠にした客室プランニングは明解そのもの。床はタモのような素木(しらき)のフローリングとライムストーン、ライトグレーのカーペットで明るい。壁は細かなところまで「竹」材の練り付けに徹していて木材・木質はいっさい使っていない。天井にはもちろん何も付いていない。ディテールは引き戸や扉の把手などまでよく考えられていて腑に落ちる。

素材や色彩が抑えられ、間接照明は各所に仕込まれていてガラスへの映り込みを避け、全体に上質感があふれている。ミニマリズムのいいところが出ていて、これはデザイナーに好評なはずだ。

最上階の「カフェ・グレイ・デラックス」で朝食をとる。香港のシェフ、グレイ・クンツ氏の料理。アプローチやダイニング空間上部は縦格子デザイン。ハーバーサイドは朝から予約で埋まっているという。さもありなん。

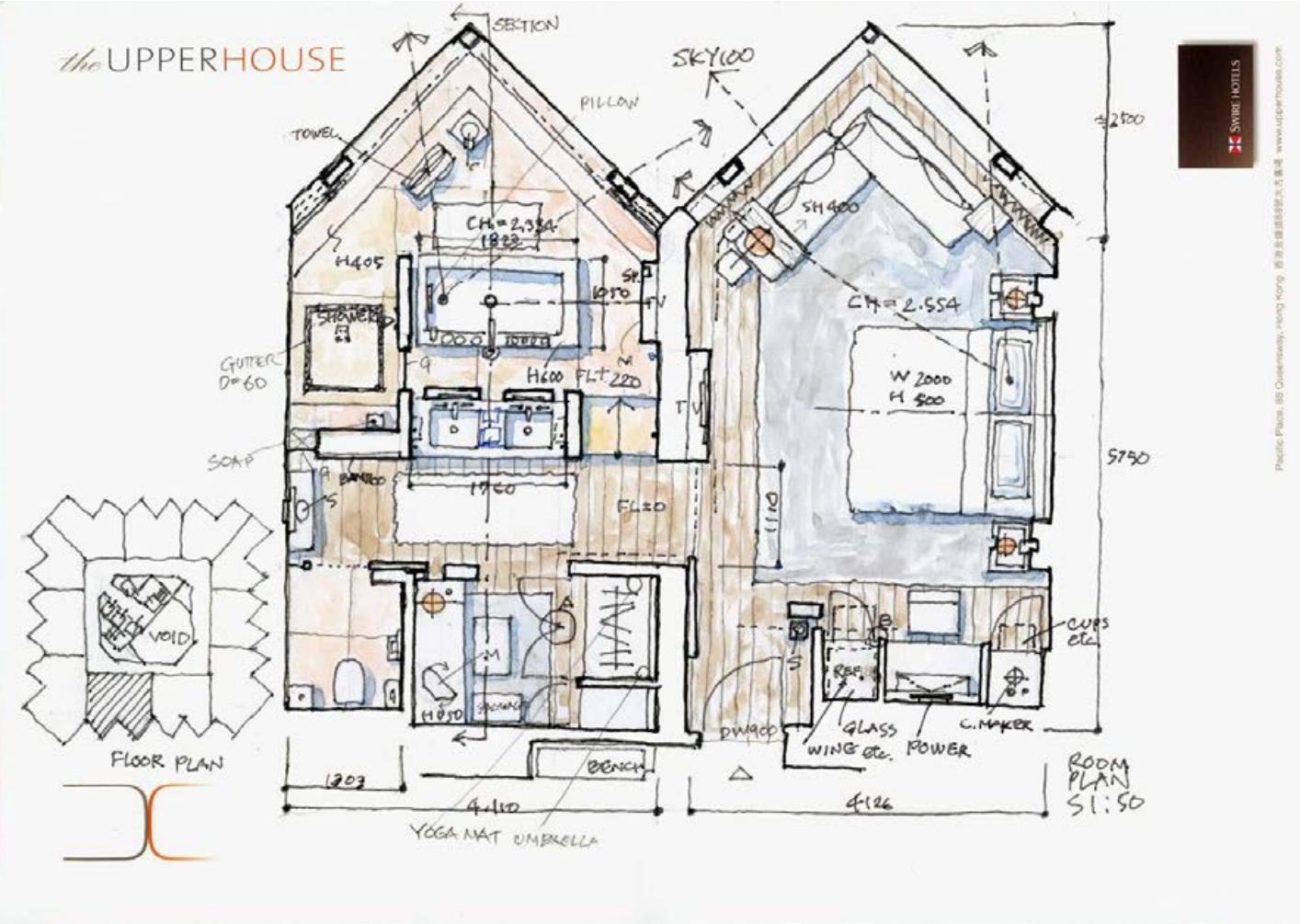
久しぶりの香港。さて今日は「環球貿易廣場」ビルの上からこちらを望んだり、アイランド側旧市街の長いエスカレータに乗ったりして飲茶の店を探して歩こうか。



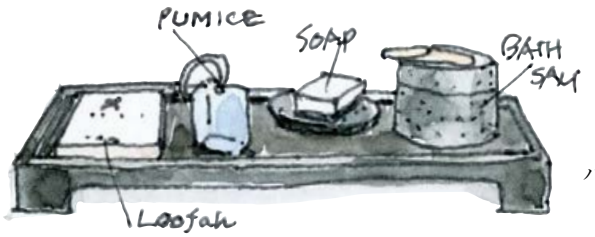
絶妙な高さ計画による
バスルーム側の
セクション。

＊Andre Fu(1975〜)：香港生まれの若き建築家、インテリアデザイナー。14歳からイギリスで教育を受け、ケンブリッジ大学卒業。AFSOを設立。代表作に「ザ・アッパー・ハウス・香港」(2009)、「ザ・フラトン・ベイ・ホテル・シンガポール」(10)、「フォーシーズンズ・ソウル」(15)など。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム』(東京書籍・光文社)、『測って描く旅』(彰国社)、『旅はゲストルームⅡ』(光文社)がある。



ビューの軸線と
明解なオープン・プランで
構成された平面。



バスタブ縁に置かれた
バスソルトなどの
アメニティ。

Text & Sketch by Ura Kazuya

The Upper House

Add／Pacific Place, 88 Queensway, Hong Kong
Phone／+852 2918 1838
Fax／+852 3968 1200
URL／www.upperhouse.com
Mail／guestexperience@upperhouse.com

1 見えているガラス窓の部屋は主室として使われ、その下は土。主室の前には屋上庭園が広がり、主室の上も屋上庭園となり、斜路で上がることができる。

天と地の家　設計／石井 修

Ishii Osamu × Fujimori Terunobu

緑を追って

Heaven and Earth House

連載 現代住宅併走 第三十六回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi
写真／普後 均

もう20年以上にわたり建築緑化に関心をもち、日本と世界のあれこれの実例を訪ねたり調べたり論じたりしてきた。そして、自分でも、失敗が多いものの、試みつづけてきた。

戦前は除いて、戦後の建築界では誰が一番早く取り組んだのか。一度だけ取り組んだ人は除いて、誰が取り組みつづけたのか。私が知るところによると、石井修にほかならない。

石井修というと、西宮の目神山に長年にわたり自邸をはじめいくつもの住宅を手がけ、自作によってひとつの郊外住宅環境を形成したことで知られるが、その目神山住宅群のなかでも屋上庭園はつくられている。

目神山を離れて、石井の屋上庭園のなかでどの作が早く、かつ充実しているかといえば、やはり1974年の〈天と地の家〉にちがいない。現代のそして今後の重要テーマとなる建築緑化の問題を考えるとき、42年前のこの家を忘れるわけにはいかない。

建築家の石井智子さんを通して施主の故植田博光氏のご家族と連絡がつき、このたび堺市の泉北ニュータウンを訪れた。

植田氏は業務用厨房器を扱う会社を大阪の天下茶屋の町屋で営んでおり、その暗さと湿度と教育環境がよくないことから脱出を企て、まず憧れの千里ニュータウンを狙ったが抽選にはずれ、次に自分と義弟のふたりでそれぞれ泉北ニュータウンに応募し、やっと当たった。当時のニュータウンはそれくらいのものだった。そして、商売を通して旧知の石井に依頼する。

娘の大野さんは、天下茶屋の町屋で石井の持参した住宅模型を目にしたときのことを昨日のことのように記憶しておられ、油土とバルサの模型に「こんな家に住むのか、と驚いた」と言う。今でこそ屋上庭園はそこそこ理解されているが、なんせ42年も前のこと、家の上に草が植わっているだけならまだしも、土の中に半分埋まって顔だけ出しているように見えるのだから、驚いて当然だろう。

2 →屋上庭園の頂部に立つ。

3 ←入口の右手には石井好みの丸い穴があく。

外観は三角定規をふたつ立てたような山形を打放しでつくっており、丹下健三の「日南市文化センター」(62)をしのばせる大地から岩が突き出すような強さは感じられるものの、屋上のただならぬ様子は外からはうかがえない。中に入り、1階の主室（茶ノ間、食堂、台所）に上がり、茶ノ間の畳に座って障子を開けると、42年前の施主ならずとも、建築緑化には目が肥えているというかスレッカラシの私でも驚く。

尻の下の床が、大きな開口部を通って、そのまま外の芝生まで延びて広がって見えるのだ。そしてゆるやかに上がり、先には庭木が生え、まわりの家並みは隠される。屋上庭園は数あれど、屋上庭園の中に家と自分が少し沈んで位置し、しかし暗さと湿気は払われ、陽光を浴び、空が広く感じられるような屋上庭園と住まいの関係は初体験。

芝生の呼び声に誘われて外に出て、主室の屋根の屋上庭園の傾面を上がり棟の上に立つと、周囲の光景は一気に開け、足下には芝生の斜面と周囲の家々が、遠くには泉北ニュータウンの独立住宅と集合住宅越しに堺の海が望まれる。

地階に少々湿気がこもるものの、主室は明るく快適で緑も心地よく、戦後につくられた屋上庭園の代表作と評して構わない。

石井修はなぜ屋上庭園に生涯かけて取り組んだのか。コルビュジエが近代建築の五原則の2番目で述べたように、〝1階をピロティによって交通用に開放し、その分減った緑を屋上で補う〟という考えからではないことは、地階をピロティ状にしていないことからわかるが、ではなぜなのか。

私が注目したのは建物と地面の接点の処理だった。写真でわかる

4 ←古墳のような埋まり方。

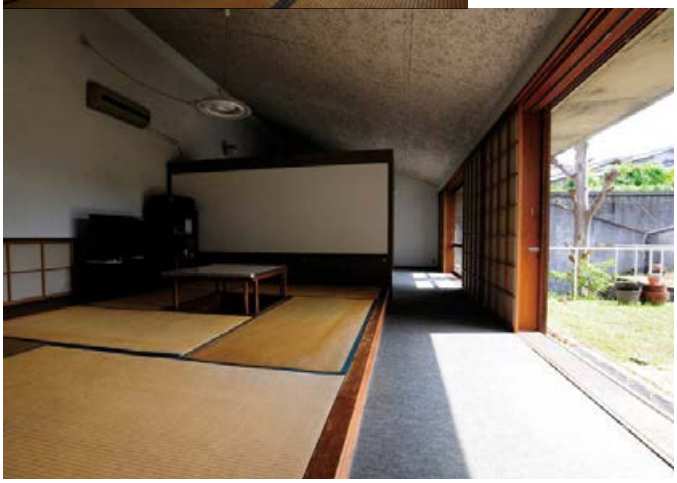
Ishii Osamu × Fujimori Terunobu

5 ↓1階。右手は食堂と台所。奥が茶ノ間。

6 ↓1階茶ノ間。右手には屋上庭園が広がる。

7 →障子を閉めると、菊竹清訓の「スカイハウス」感が生じる。

8 ↓施主の母のための部屋(元は客室)。



9 南北2棟の中間には小さな中庭が口をあける。

10 ←地階の居間から中庭を見る。

11 →地階の子ども室。

ように、側溝の内側にまず自然石を乱石で積む。ここまでは普通の石垣だが、その先が普通とは異なり、石垣の上端は凸凹のままにし、じかに芝を生やし、そのまま盛り上げて、雑木を植え、盛り上がった上端でこれまたじかに打放しの壁が立ち上がる。石垣と土手、土手と建築のあいだがじかに連続し、石垣と土手の境を画すモルタル塗りとか、土手と建築のあいだを切る溝や犬走りとかそういう断切要素をなくしている。

その結果、大地と建築のあいだが連続し、建物が大地の中から生え出たように見えてくる。

石井が大地と建築の関係にきわめて自覚的だったことは〈天と地の家〉という命名からも、次の設計主旨からも明らかになる。

「長い人類の住生活が地表のみで行われるようになったのは、いつ頃からであろう。横穴の住居、竪穴の住居、それに地上にそびえ立つ現代の住居、そこには人類と自然との果てしない葛藤の歴史がある。そしてこの住宅が、古代の竪穴式住居を回帰点として土や緑の自然を身近において暮らせる住宅となったとき、現代人である私たちの生活にない、何ものかをもたらしてくれることができるのではなかろうか」

縄文時代の住居形式として知られる竪穴式住居を強く意識して設計したことがわかるし、現代人の生活から失われたものを取り返そうとしたのだともわかる。

縄文住居を念頭に置いた近代住居の第1号は、1937（昭和12）年の白井晟一の「歓帰荘」で、第2号は74（昭和49）年の石井修の〈天と地の家〉ということになる。その間、37年。石井が白井に関心を示していたなら歴史家としてはうれしいが、そういうことはなかったようだ。

12 ↓1階から地階に下りる階段。

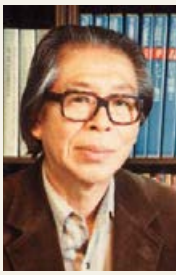
天と地の家

Heaven and Earth House

建築概要	
所在地	大阪府堺市南区
主要用途	専用住宅
設計	石井修／美建・設計事務所
構造設計	松原建築研究所
施工	中野工務店
敷地面積	384.78㎡
建築面積	81.02㎡
延床面積	184.32㎡
階数	地下1階、地上1階
構造	壁式鉄筋コンクリート造
竣工	1974年
図面提供	石井智子／美建・設計事務所

石井 修

1922年奈良県に生まれ、吉野工業学校を出て大林組に入社し、積算をやる。徴兵でマーシャル諸島に行き、軍事用のコンクリート構造物をつくる。戦後は、それまでの経験を生かすべく石井工務店を始めるが、うまくいかず閉店。私の知る限り、よい住宅をつくろうとして工務店を開いたものの、よくすればよくするほど赤字になっての閉店は、戦前の吉田五十八と戦後の石井のふたりしかいない。自然と火（暖炉）への深い共感を示し実践した建築家で、一度だけお目にかかっている。2007年、没。



Ishii Osamu

写真提供：石井智子／美建・設計事務所

藤森照信

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞。

Fujimori Terunobu

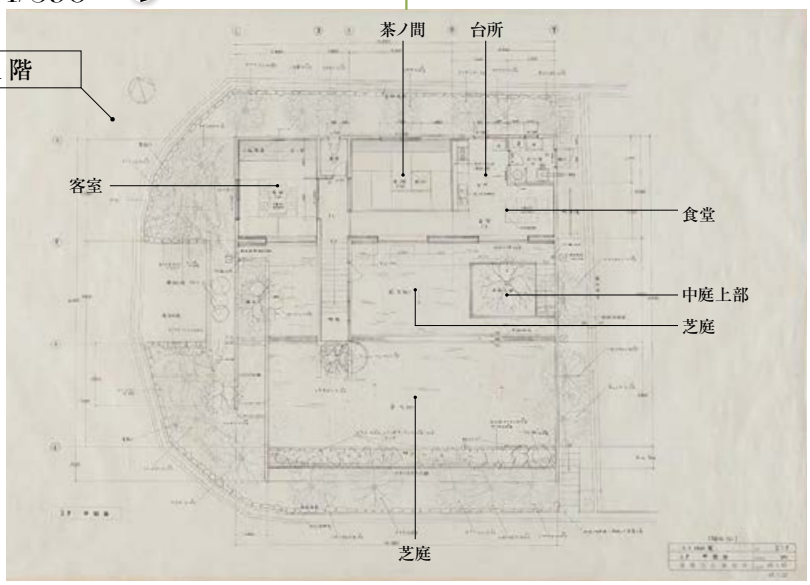
平面図

0 2 4m

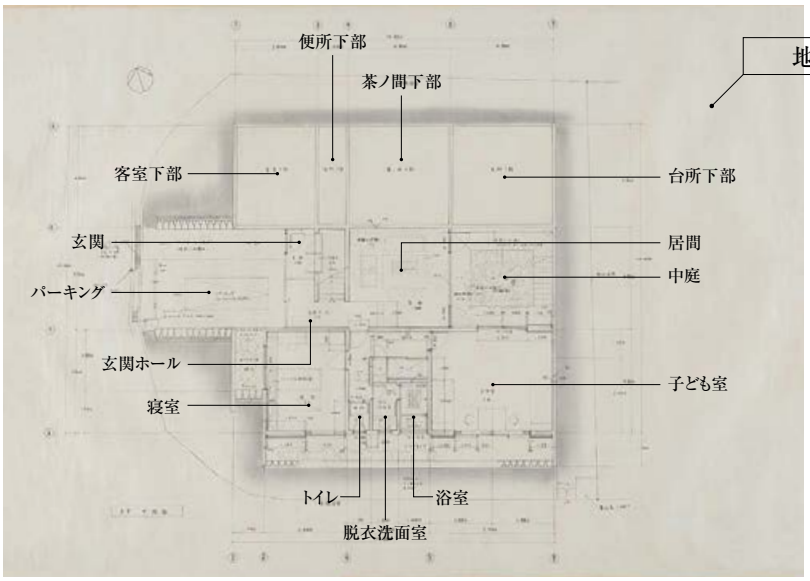
1/350

N

1階



地階

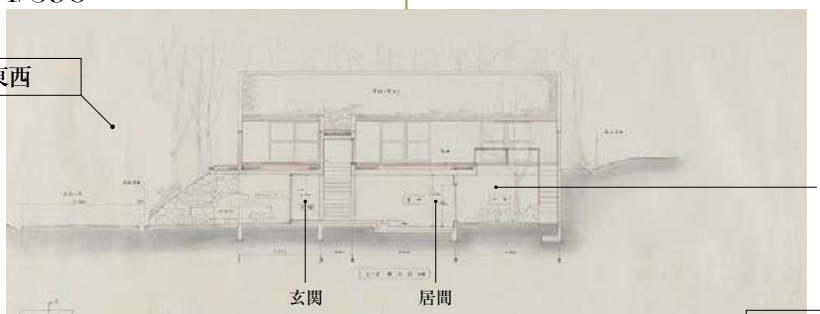


断面図

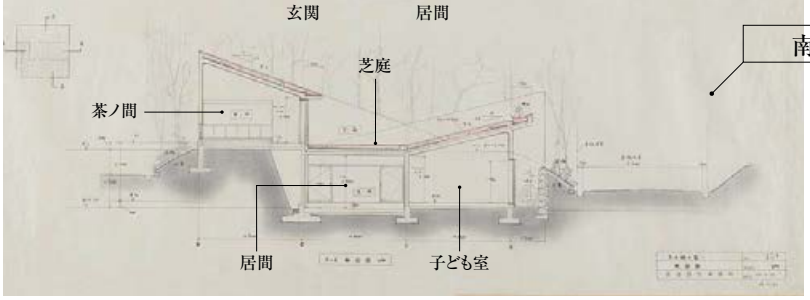
0 2 4m

1/350

東西



南北



星のや東京

HOSHINOYA Tokyo

都心に生まれた「塔の日本旅館」

取材・文／大山直美　写真／川辺明伸

1F "HOSHINOYA Tokyo"

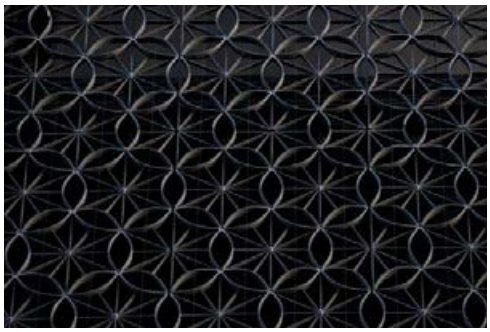
玄関

←玄関

左側の壁一面の巨大な下駄箱は、見せる収納としてデザイン。通気性を考慮し、編んだ竹と栗の木枠の組み合わせ。

←外観

オフィスビルに囲まれた「星のや東京」の夜景。グラデーション状に、外装模様が浮かび上がる。



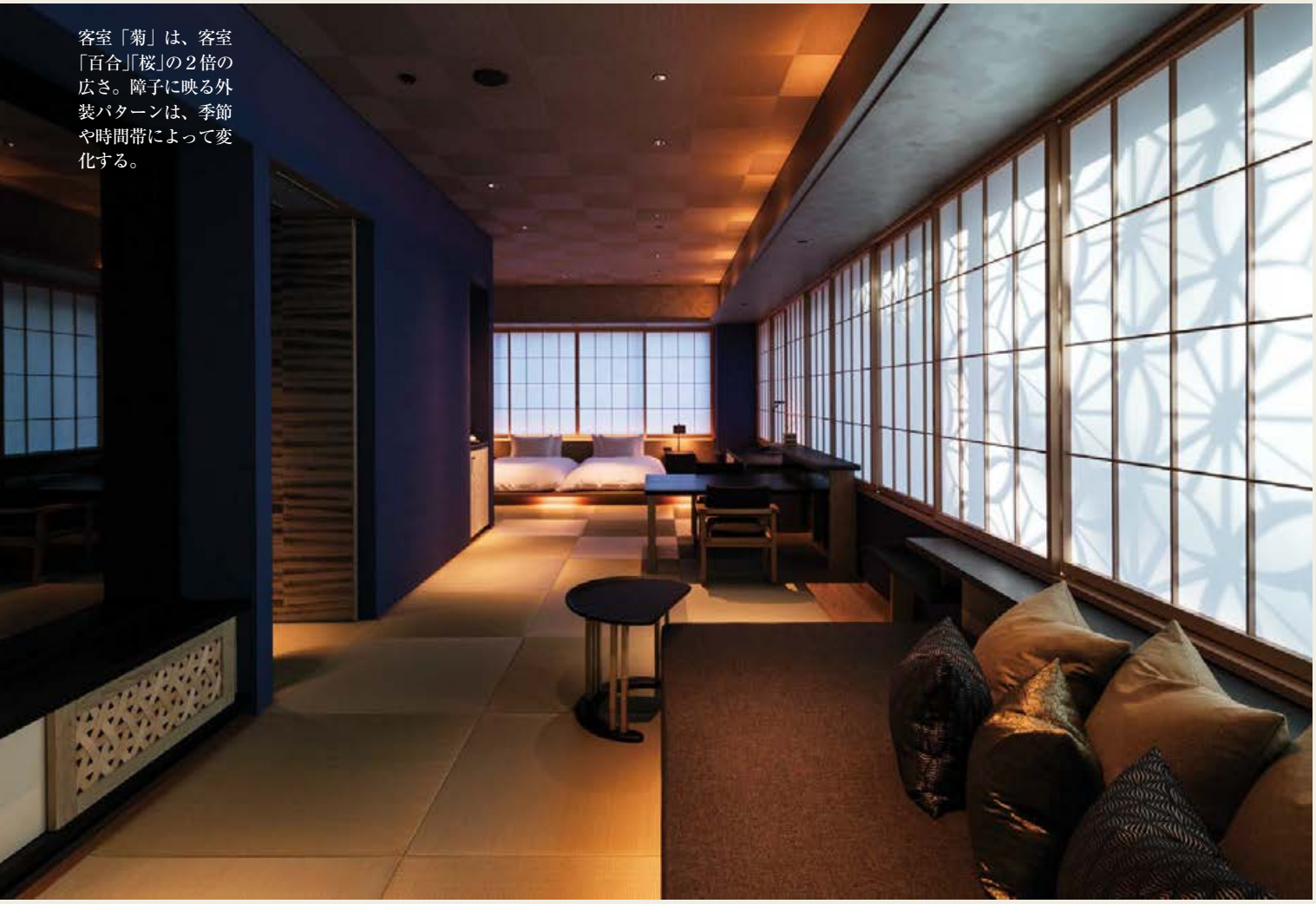
←外装ディテール

麻の葉くずしをイメージした外装ディテール。設計時は、原寸大で複数案を作成、検討を重ねた。

全国各地でホテルやリゾート施設を運営する星野リゾートが、2016年7月、東京・大手町のオフィス街に「星のや東京」を開業した。旅館計画・内装設計・外装デザイン協力は、これまで4つの「星のや」を手がけてきた東利恵さん率いる東環境・建築研究所が担当。建築設計の三菱地所設計とNTTファシリティーズとのコラボレーションにより、チーム一丸となって取り組んできたという。

都心のホテルといえば、大規模な複合ビルの上層の数フロアを占めるといった構成が一般的だが、「星のや東京」は小規模ながら独立した一棟建ちで、しかもコンセプトは「塔の日本旅館」。すでに成り立ちからして、周辺のホテルとは一線を画している。

地上18階建ての建物は1階がエントランス、2階がレセプション、3～16階が客室という構成で、1フロアの客室数は各6室、全84室のこぢんまりした施設だ。遠くから見ると全体に黒



客室「菊」は、客室「百合」「桜」の2倍の広さ。障子に映る外装パターンは、季節や時間帯によって変化する。

↑客室「菊」内観

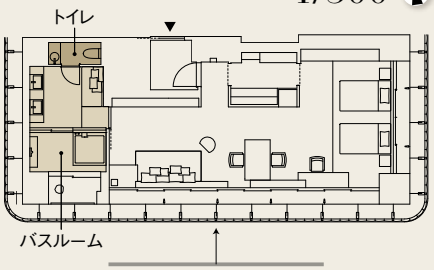
写真右／トイレには、専用の洗面器を設置。左／バスルームの奥には、小さな坪庭をしつらえている。

菊（3名定員）

←バスルーム

←トイレ

1/300



客室「菊」平面図

0 2 4m

いビルは、近づいてみると全体が麻の葉くずしをイメージした柄のスクリーンで覆われている。東さんによれば、質素倹約が求められた江戸時代に発達した、遠目には無地に見える細かい柄の「江戸小紋」の着物地から発想した外装であり、角にアールをつけることで重箱のような繊細さも加味したという。

都心に日本旅館を創出する「玄関」の仕組み

しかし、見かけはやはりビル。どこが「旅館」なのかと半信半疑で進むと、自動ドアの向こうにはホテルとの決定的な違いが待っている。まず風除室に入ると「玄関さん」と呼ばれるスタッフが出迎えるが、目の前には青森ヒバ製の分厚い扉が立ちはだかり、宿泊客以外はここから先へは入れず、中もまったく見えない。その分厚い扉が開くと、上がり框の向こうに、間口が狭く、奥に長く、高さ5・5mもある畳敷きの玄関が出現。左手に天井高いっぱいに造り付けた下駄箱が連続するさまは壮観だ。

館内はエレベータ内まで、ほとんどが畳敷き。ロビーやレストランに一般人が出入りするホテルとは異なり、靴を脱いで上がった瞬間から家に上がり込んだような安心感に包まれる、それが日本旅館ということだろう。

バスルームから、室内を見る。仕切りには調光ガラスを使用。瞬時に、曇らせることが可能。

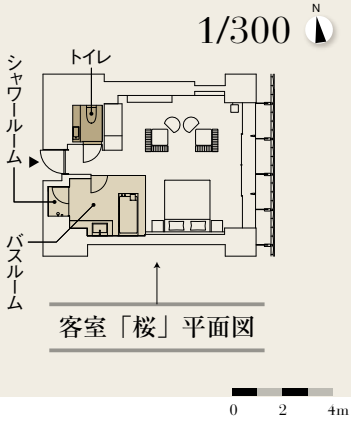
↑客室「桜」内観+水まわり

桜(2名定員)

写真右／視線を低くするよう、家具の高さを工夫している。左／壁や床には、においが残りにくい素材を使用。「星のや」全体で、清掃しにくい箇所をリストアップ。そのノウハウが生きている。

←トイレ

←客室内観



東さんは長い付き合いの星野リゾート代表・星野佳路さんと、大手町につくる宿泊施設について話しあった際、まず首都東京になくなってしまった「旅館」をつくろうということになり、それには「靴を脱ぐ」行為が不可欠だと提案したそうだ。

「靴を脱がない大型旅館もありますが、それは旅館という皮をかぶっているにすぎない。本来の旅館とはやはり靴を脱いで、もう少し日本的な距離感のなかでサービスを提供すべきではないか、そうしなければホテルとの違いがわからないと思いました」と東さん。

これに対し、総支配人の菊池昌枝さんは「最初に靴を脱ぐ施設にすると聞いたときは、冗談かと思いました(笑)。うまくいくはずがない、何百足もの靴をどうするのか、と。でも、図面であの玄関の圧倒的なスケール感を見て初めて、あ、できるかもしれないと思ったんです」と振り返る。

「星のや」はどの施設にも、たとえば京都なら舟でアプローチする、軽井沢なら離れた駐車場から専用車に乗り換え、いつのまにか敷地内に入るといった具合に、日常から非日常へと切り替えるプロセスが備わっている。限られた面積の都市型施設で瞬時にこのスイッチを巧みに切り替える場として考えたのが、あえて玄関という機能だけに集約

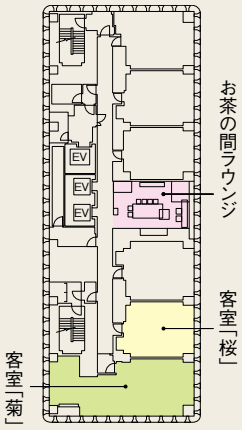
使用する器や食材はすべて、吟味して選んでいる。「お客さまとの時間を過ごすため」と、菊池さん。

↑お茶の間ラウンジ

お茶の間ラウンジ

1/800

3F–16F
フロア平面図



畳敷きの廊下は、都会を歩き疲れた足にも、やさしい。障子の裏には、配電盤が隠れている。

→廊下

し、靴を脱いで畳の感触を楽しむと同時に、経験したことのないプロポーションを体感できる1階の空間だったと東さんは語る。

「お茶の間ラウンジ」で旅館の過ごし方に多様性を

客室のあるフロアに上がると、そこにはもうひとつの「旅館」らしい場が用意されている。各フロアには6つの客室以外に「お茶の間ラウンジ」と名づけたスペースがあるのだ。ここは宿泊客が客室から着物風の滞在着のまま、自由に行き来できるセミプライベートなくつろぎの場で、朝から晩までフロアごとに「お茶の間さん」と呼ばれる専任スタッフが常駐。チェックイン時のお茶とお菓子に始まり、コーヒー、お酒、朝食のおむすびと味噌汁までを無償で提供してくれるという。スタッフやほかの宿泊客と会話を楽しむもよし、デスクコーナーで家族に気がねなく仕事に没頭するもよしと、多様に活用できそうだ。

東さんいわく、「各フロアに設けるとなると、客室を1部屋つぶすことになるので、最初はおそるおそる提案したのですが、星野さんはむしろスペースも広くとって、スタッフをひとりずつ配置するという勇気ある決断をした。そのことで、完結した

17F

“HOSHINOYA Tokyo”

←内風呂

←露天風呂

写真提供／星野リゾート

大浴場

大浴場は、敷地内で三菱地所が掘削した天然温泉を使用。強塩温泉を楽しめる。

内風呂の奥には、天井が高く抜けた露天風呂。都心を感じさせない造り。

2F

“HOSHINOYA Tokyo”

←レセプション

←ロビー

ロビー

写真左／カウンターは、東さんと長年の付き合いがある、ヒノキ工芸が製作した。

右／奥には、雅楽などを披露する畳の舞台。お酒を飲みながらの観覧も。

←男子トイレ・小便所

←女子トイレ・ブース

←女子トイレ・洗面

←多機能トイレ

パブリックトイレ

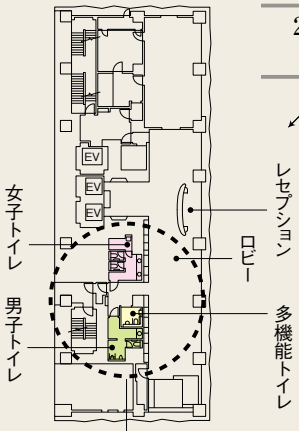
パブリックトイレは乾式清掃。１時間に１回、清掃チェックを行っている。男子

小便器は、清掃のしやすい壁掛式を採用。多機能トイレも完備している。

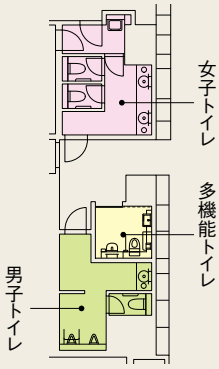
0 2 4m

1/800 N

2F フロア平面図



2F トイレ平面図



N 1/300

0 2 4m

HOSHINOYA Tokyo

星のや東京

小さな旅館が14層積み上がったような明快な施設が生まれたわけです」。菊池さんによれば、実際に、ワンフロア6室分をまとめて予約し、同窓会のように楽しむといった例が増えているそうだ。

旅館の内装と水まわりは時代に合ったものに

客室は各階に1室ずつ「菊」の客室（3名定員、83㎡）があり、残り5室は「百合」と「桜」の客室（2名定員、41～49㎡）。床はもちろん畳。日本の空間ならではのくつろぎを演出するため、「菊」には床から一段上がった寝台に布団を並べ、「百合」「桜」には「星のや京都」で開発した「畳ソファ」を配するなど、ホテルとは趣の異なる内装や重心が低い家具でしつらえてはいるものの、決して純然たる和室ではない。

水まわりで目を引くのは、浴槽。素材は黒い人工大理石だが、肩までつかれる深さのある日本らしいフォルム。「菊」は洗い場を設け、大きな浴槽につかりながら坪庭越しに外気を感じることもできる。一方、「百合」「桜」は洗い場をなくし、独立したシャワールームを設置。日本的なお風呂の入り方は天然温泉の大浴場で味わってもらおうという割り切った造りだ。

トイレを独立させている点も、外国人宿泊客を想定したホテルでは珍しいが、たとえ洗い場のない浴室でも、トイレは別にするのが星野流だという。「友人同士だと、一方が入浴中にもう一方がトイレに行けないのが不便ですよね」と東さん。トイレ設備については、個人的にTOTOの贔屓であり、星のやはすべてネオレストを採用していると笑いながら、こう続ける。

「やはり日本製が一番使いやすいんです。アジア諸国に行くと、同じアジア人なのに足が届かない便器を使っていたり、便座が平らじゃなくて座ると痛かったり……。海外製品にストレスを感じている人は多いので、内外で日本のトイレを売るチャンスは今後ますます広がるのではないでしょうか」

今回の内装設計全般については、こうしめくってくれた。

「ここでは和室をつくるという作法は捨てようと思いました。今やマンションでも和室がなくなりつつあるし、和室自体も平安時代には置き畳だったのが、だんだん発展して今のような形になったわけで、様式はつねに変わっていくものです。そう考えると、和室がずっと同じである必要はなく、もっと現代に合った使いやすい形に進化させていかなければならない。そこで、この独特の感触を楽しめる唯一の素材である畳を、床材という感覚で使おうと考えたんです」

菊池さんに、外国人の反応はどうかと聞くと、靴を脱ぐことを嫌がるのではないかという心配も杞憂に終わり、むしろ楽しんでいる欧米人が多いとのこと。『『東京で日本を感じた』という声が多いですね」と菊池さん。

西欧型のホテルとも、昔ながらの旅館とも異なる「星のや東京」の内部空間は、新しい宿泊施設の台頭を感じさせる。ゆくゆくは海外の都市でも、靴を脱いでホッとくつろげる「現代の日本旅館」に泊まれる日も夢ではないのかもしれない。

星のや東京
総支配人
Kikuchi Masae
菊池昌枝

東 環境・
建築研究所
代表取締役
建築家
Azuma Rie
東 利恵

建築概要

所在地	東京都千代田区大手町1-9-1
事業主	三菱地所（再開発施行者）
主要用途	宿泊施設
設計・監理	三菱地所設計・
	NTTファシリティーズ
	設計監理共同企業体
旅館計画・内装設計・	東 環境・建築研究所
外装デザイン協力	
施工	戸田建設（建築）・
	斎久工業（給排水衛生設備）
敷地面積	1,334.64㎡
建築面積	742.49㎡
延床面積	13,958.29㎡
階数	地下3階／地上18階
客室数	84室
構造	鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋
	コンクリート造（免震構造）
竣工	2016年4月

おもなTOTO使用機器

2階　パブリックトイレ
●男子トイレ
ウォシュレット一体形便器NJ2　CES989PPT46／
マイクロ波センサー壁掛小便器XPU11／
湯水混合栓　KW2191052R（CERA）
●女子トイレ
ウォシュレット一体形便器NJ2　CES989PPT46／
湯水混合栓　KW2191052R（CERA）
●多機能トイレ
フラットカウンター多機能トイレパック
XPDAARS3111WWG + YMK52K／
ベビーチェア　YKA15

客室
ウォシュレット一体形便器NJ2
CES989RT46

17階　大浴場
壁付サーモ水栓、シャワーヘッド
TMWB40EC1

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、それぞれの土地柄、
会社の性格、そして会社をリードする
人物の性格、マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

いい家づくりは、いい「人づくり」から

代表取締役 加葉田 和夫さん

２０１６年、ひまわりほーむは創業20周年を迎えた。３人で始めた小さな会社は、20年のあいだに70人を超える企業に成長。地元石川で知名度を高め、東京での展開も着実に進んでいる。ほかの会社が伸び悩むリフォーム事業でも好調だ。創業時に取引先の人たちから「つねに前向きで明るい集団に」という想いを託された社名のごとく、グングン伸びているといっていいだろう。しかし創業者でもある社長の加葉田和夫さんは、会社の成長を少し違う視点でみている。

自信をもって勧められる建材しか使わない

加葉田さんと建築の出合いは、加葉田さんが庶務として地元の住宅会社に入社したことから始まる。小さな頃から建築に興味があった、ということもなく、たっての希望で入社したわけでもなかったが、お客さまとじかに接したことをきっかけに生来のポジティブ思考が目覚めたのだろう。庶務から営業への転身を希望し、移ってからはトップセールスを続ける。やがて恩師として慕う先輩とともに起業。さらに8年後、今度は自らが中心になって、ひまわりほーむを設立する。

営業に転身したのは「家を売るなら、もっときちんと勉強して、自信をもって提案したい」という想いから。ひまわりほーむを創業したのは「小さな工事でも、大切に、真面目に取り組む姿勢をもちつづけたい」という想いから。共通するのは、お客さま第一主義だ。ひまわりほーむ石川本社では、10種類ほどの構造材を屋外に並べて経年変化を実証するほか、さまざまな建材を試している。実際に使用する構造材も、柱はすべてヒバ、ヒノキのムク材で4寸角、梁や桁は３００㎜以上の太さで徹底している。自分たちが自信をもって勧められる建材・部材で、顧客満足度を高めたいという意気込みの表れだ。

社員のモチベーションを保つ経営方針

しかし、お客さま第一主義は、ひまわりほーむを支える一方の車輪でしかない。加葉田さんがより目を向けているのは、社員たちだ。

ひまわりほーむが謳う「全棟長期優良住宅」「全棟性能表示」「全棟ムク材使用」といった全棟主義は、他社との差別化が目的のようにみえるが、じつは社員へのメッセージ。「具体的なルールを決めることで、安易な妥協をしなくなる」

また、新築でもリフォームでも、1件仕事をすると、担当した営業マンと現場監督がずっとその家の担当としてかかわりつづけるシステムは、「アフターの担当者を置くと、家ができたら知らない人が担当者としてやってくることになる。お客さまは知らない人より、なじみのある人に来てほしいはず」という一面のほかに、「アフターの担当者は喜んで仕事ができるのか」という想いがある。アフター仕事はクレーム処理。その部署に配属になった人は、はたしてモチベーション高く仕事を続けられるのか。

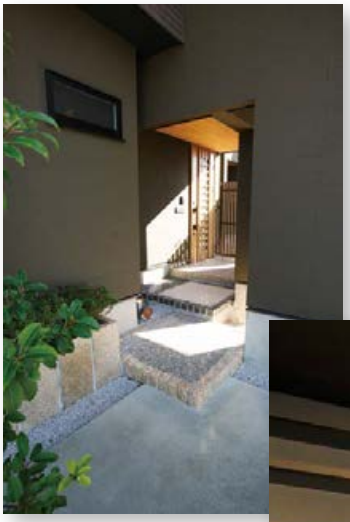
つまり、いい家を提案・提供してお客さまに喜んでもらう目的のために、社員がつねに前向きに、高い意識で仕事に向き合えるように心を砕く。日常業務以外にレポートを課すなど、社員が自分を高めていくオリエンテーションもさまざまなかたちで用意されている。社員への期待は大きく、信頼は厚い。

「うちのような小さな会社には、学校でずっと一番だったような人は来てくれません。だから期待されて努力した経験があまりないんです。その分、伸びしろがすごく大きい」

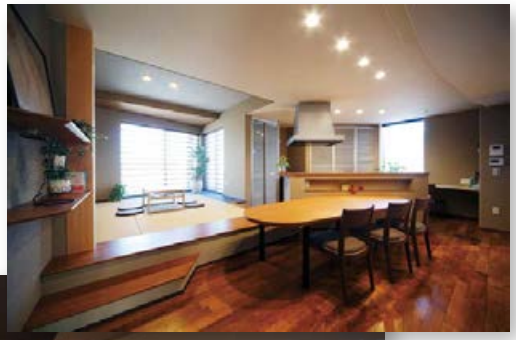
最初の担当者がずっとその家にかかわりつづけるのは、昔の「出入りの棟梁」がいるような状態に近く、ある意味理想的な関係だ。多くの会社が合理化、効率化の名目で切り捨ててきた人と人のつながりを重視しているともいえるだろう。ただ、仕事をすればするほど個人への負荷が大きくなっていくジレンマは残る。少しでも解消するには、人材育成を続けて人を増やしていくしかない。

住宅会社を率いるものとして「きちんとした家を提供することで成功していかなければ、自分たちのような会社の存在価値がない」と言い切る。加葉田さんの家づくりは、「すぐれた技術者」や「すぐれた営業マン」ではなく、「すぐれた人」を育てることで未来へとつながっていく。

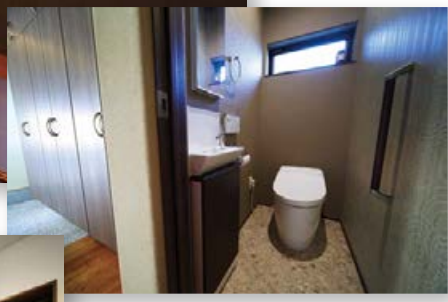
取材・文／市川幹朗　写真／山下恒徳


2

1／金沢・米泉（よないずみ）ニュータウン内の展示場。1階LDKは、小上がりの畳リビングで、動きのある空間。2／玄関前。アプローチは、飛び石をイメージしている。3／2階寝室。中央の畳リビングに座る、社長の加葉田和夫さん。


1

3


4

6

Kabata Kazuo

かばた・かずお／1957年石川県生まれ。20歳で地元の住宅会社に入社、22歳で営業に転身した。96年にひまわりほーむを設立。「ひまわりのように前向きな企業でありたい」という想いのもと、社員全員で「全棟」にこだわる家づくりに取り組む。

5

4／玄関脇のトイレ。5／1階の浴室・洗面室。6／玄関ホール。扉奥はLDK。「通り土間」を再現した通路は、奥の部屋まで通じている。

㈱ひまわりほーむ

Data

●本社所在地	石川県金沢市新保本4-66-6
●電話	076(269)8100
●代表取締役	加葉田和夫
●会社設立	1996年
●従業員数	74人
●事業内容	建築工事の設計・施工・請負・管理、リフォーム工事の設計・施工
●売上高	36億円(2016年3月期)
●URL	www.e-himawari.co.jp
●TOTO使用機器	・キッチン　CJシリーズ
	・浴室　サザナ
	・洗面所　システム・Jシリーズ
	・トイレ　NJ2

建築の居場所

Yasushi Horibe – A Human Space for Architecture

自然素材をたくみに取り入れつつ、幾何学的な美しさと静謐なたたずまいをもつ空間を
数多く生み出してきた建築家・堀部安嗣氏。作品が完成するまでの道のりや、
施主や施工者などそこに携わる人々の姿を、映像を中心に紹介。
その裏に隠された、堀部氏の建築に対する想いを浮き彫りにします。

©Ken'ichi Suzuki

イヴェール ボスケ
（石川県、2012年）

©堀部安嗣

講演会「建築の居場所」

イイノホール（東京都千代田区）で
堀部氏の講演会を開催します。
詳細はTOTOギャラリー・間ウェブサイトをご覧ください。

ギャラリートーク

展覧会会期中に、ギャラリートークを開催予定。
詳細は、TOTOギャラリー・間ウェブサイトにて
ご案内いたします。

建築の居場所

文／堀部安嗣

建築は、人の肉体の不完全さを補うために生まれました。

雨、雪、日差し、湿気、風、暑さ、寒さなどの自然の脅威から身体を守り、安心して日々を送るための仕組みが必要だったからです。

そうした人間の身体的な要求から生み出された建築は、純粋な機能と、それにふさわしい佇まいをもっていたように思います。そんな原初的な建築は、シンプルであるからこそ、人と人が穏やかに向きあうことができる、あるいは孤独の時間を豊かに過ごすことができる場所も同時に生み出していたのではないでしょうか。そこには偉大な自然と、小さいけれども尊い人の営みとの調和の関係を見ることができます。そしてその風景はずっと昔から変わらず、人の記憶の奥底にあるのです。

今時を経て、建築は人びとのたくさんの希望や欲望を背負い、より複雑な役割を担うようになっています。それに伴い、建築が本来もっていた基本的な役割と佇まいが少しずつ失われてきているように感じています。建築が人の身体から、そして自然から離れていっているのだと思います。

＊

現代の生活や環境にしっかりと適合しながらも、人の等身大の身体的要求に軽やかに応えるもの。

太古からの自然や人の記憶を呼び覚ますよう

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY · MA

次回予告

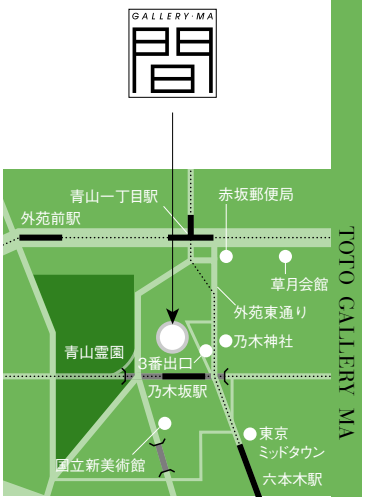
坂　茂
プロジェクツ・イン・プログレス

世界中で建築設計と災害支援の両面でめざましい活動を続け、2014年にプリツカー賞を受賞。本展は、世界各地で進行中のプロジェクトにおいて新たに開発している素材、構造、工法をモックアップ中心に紹介します。

会期
4月19日(水)〜7月16日(日)
講演会
4月19日(水)／有楽町朝日ホール
＊事前申し込み制
詳細は2月初旬、
TOTOギャラリー・間ウェブサイトをご覧ください。

TOTO
ギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00〜18:00
休館日／月曜日・祝日
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車7番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車4a出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

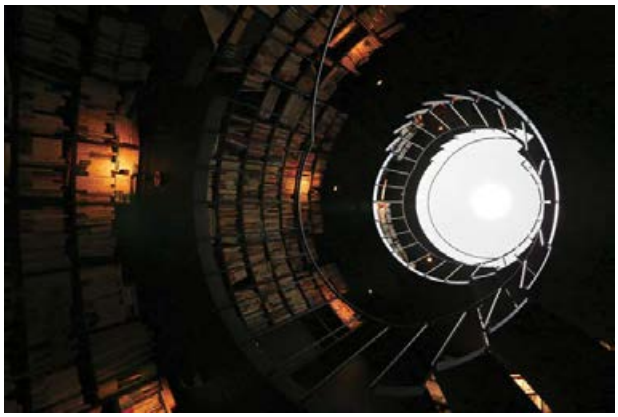


www.toto.co.jp/gallerma/

会期／2017年1月20日(金)〜3月19日(日)

堀部安嗣
Yasushi Horibe

堀部安嗣(ほりべ・やすし)／1967年神奈川県横浜市生まれ。90年筑波大学芸術専門学群環境デザインコース卒業。91〜94年益子アトリエにて益子義弘に師事。94年堀部安嗣建築設計事務所を設立。2002年第18回吉岡賞を「牛久のギャラリー」で受賞。07年〜京都造形芸術大学大学院教授。16年日本建築学会賞(作品)を「竹林寺納骨堂」で受賞。代表作に「南の家」(1995年)、「ある町医者の記念館」(95年)、「伊豆高原の家」(98年)、「KEYAKI GARDEN」(2008年)、「イヴェール ボスケ」(12年)、「阿佐ヶ谷の書庫」(13年)、「竹林寺納骨堂」(13年)、「鎌倉山集会所」(15年)など。著作に『堀部安嗣の建築 - form and imagination』(07年、TOTO出版)、『書庫を建てる』(14年、新潮社)、『堀部安嗣作品集 1994-2014 全建築と設計図集』(15年、平凡社)など。



阿佐ヶ谷の書庫
(東京都、2013年)
©堀部安嗣

竹林寺納骨堂
(高知県、2013年)

展覧会会場で短編映画を上映

「堀部安嗣展　建築の居場所」会場にて、「竹林寺納骨堂」や「阿佐ヶ谷の書庫」を含む堀部氏の作品と、作品に携わる人たちを中心に編まれた短編映画を上映します。

撮影・編集／テレビマンユニオン

な、原初の力を感じられるもの。
特殊なものではなく、誰もが納得して心落ち着ける佇まいをもつもの。
建築がもう一度このすがたを表すことができたのなら、建築も人も、本来の居場所に戻っていけるのではないかと思います。

＊

考えてみれば建築設計の仕事とは、さまざまな居場所をつくる仕事、と言うこともできるのではないでしょうか。
住宅であればそれぞれの家族の居場所をプランのなかにイメージしていきます。公共建築であれば利用者一人ひとりの居場所を考えたり、その建物を支える人びとの居場所も同時に考えなければなりません。またその建築に携わる工事関係者、職人、あるいはメーカーや工場で働く人びと、林業に従事する人びとの確かな居場所を、建築設計を通して見出していくことも大切なことだと思います。
ひとつの建築をつくることでさまざまな人びとのための居場所が数多くつくられ、それらが安定した結びつきをどうしたら得ることができるのだろうか。
そんなことを考えながら、日々建築をつくっています。

TOTO創立100周年特集

TECHNOLOGY

of water, you will find us.

取材・文／新建築社

第1回
建築と歩んだ100年

設備機器の進歩は建築のあり方も変えました。
TOTOの100年を振り返り、
建築と設備の関係を読み解きます。

1917年、衛生陶器の製造・販売を目的に東洋陶器株式会社（現TOTO株式会社）が設立されました。そして今年5月で創立100年を迎えます。この100年を節目として、4回にわたり特集を組みます。第1回は「過去」を振り返り、100年にわたってさまざまな製品が生まれた背景を、社会や建築とリンクして紹介します。

衛生陶器の製造開始

黎明期
技術がもたらす新しい生活の幕開け

2017

TOTO WATER

Wherever you feel the touch

1917年は第一次世界大戦の真っ只中で、日本は連合国の一員として参戦していた。海外ではロシア革命が起こった年でもある。世界が変わりつつある中、建築界も様式建築からインターナショナルスタイルになる過渡期を迎えていて、1914年には、ル・コルビュジエが提唱した、住宅の大量生産のための鉄筋コンクリート構造システム「ドミノ・システム」が発表されている。

日本でも、「ドミノ・システム」と同じ1914年に完成した「三越本店」に、その萌芽を感じることができる。横河民輔の設計で、一部装飾的とはいえ、鉄筋コンクリート造による柱と梁の端正なスタイルは、これからの新しい都市建築のあり方を表現していた。さらに「三越本店」で注目すべき点は日本初のエスカレーターをはじめ、エレベーター、スプリンクラー、全館暖房などの最新設備が導入されたことである。設備の発展で人びとの暮らしが変わりつつある時代で、TOTOの出発点も衛生的な生活を日本に普及させたいという想いがあった。

TOTOの創立者である大倉和親は、父の大倉孫兵衛とともに1903年に欧州に視察に行き、真っ白で清潔な衛生陶器を目の当たりにし、「衛生的な陶器の便器を普及させることは、必ずや社会の発展に貢献する」という決意のもと、衛生陶器普及の道を歩み始める。私財を投じて製陶研究所をつくり膨大な試行錯誤の末に1914年に国産初の腰掛式水洗便器が完成。工場建設に動き出し、1917

トンネル釜完成

年に北九州の小倉に東洋陶器株式会社を創立した。原料や燃料の入手先が近いこと、製品を輸出するための門司港が近くにあったからである。創立当初から海外展開を視野に入れた想いを「東洋」という社名に込めた。

下水道のインフラが整っていない状況だったため衛生陶器の注文は少なかったが、1923年の関東大震災を機に復興特需を受け「丸ビル」などに導入されるようになる。昭和に入ると下水道の普及や高層建築がつくられ衛生陶器の需要も伸びた。1936年竣工の「帝国議会議事堂（現国会議事堂）」はすべてを国産品で建設するという趣旨のもと、TOTO製品も数多く採用された。

帝国議会議事堂／提供：毎日新聞社

戦後復興

豊かな生活を求めて

和親は「衛生陶器は付属金具とセットして機能を発揮するものであり、そのためには優秀な水栓金具の自製化が望ましい」という構想を創立時から持っていた。戦後復興が始まって間もない1946年に水栓金具の自製を開始。さらに1958年にFRP製浴槽「トートライトバス」を発売し、衛生陶器以外に水栓金具やFRPなどを生産できるようになり、水まわり総合メーカーとしての核が形成された。

戦後は住宅不足が深刻になり、建築界では「最小限住宅」がテーマになっていた。政府による住宅供給は進まず、資材不足もある中で、単なる小規模な住宅ではなく、機能的な立場から必要最低限な要素を抽出し、しかも豊かな空間をつくるというものである。池辺陽の「立体最小限住居」（1950年）などが代表的である。また、建設省の依頼を受け、吉武泰水、鈴木成文、郭茂林によって考案された公営住宅の標準プラン「51C型」は、今日でも使われている「ダイニング・キッチン（nDK）」という表記の生みの親であり、1955年に発足した日本住宅公団（現都市再生機構）に大きな影響を与えている。

日本住宅公団／提供：毎日新聞社

公団により、台所、トイレ、洗面、浴室と機能別に分けた計画が採用されたことで、水まわり製品も変化をしてきた。公団発足当時は和風両用便器の採用が多かったが、排水パイプを接続するだけですむ腰掛便器は施工が簡単なため1960年には全支社で採用されることとなり、TOTOの創立の基となった腰掛便器は急速に広まっていくことになった。壁掛洗面器も施工の手間を省くため木製キャビネットに洗面器を固定した洗面ユニットを1966年に採用する。TOTOでは、これを一般住宅向けにカウンターや混合栓を付けた「洗面化粧台」として1968年に発売した。台所で洗面や歯磨きをしていた習慣から洗面専用のスペースが一般的になり始めた。

高度経済成長期

システム化による生産性の向上

高度経済成長期で、戦後復興の象徴といえる東京オリンピック前後は建築ラッシュに沸いていた。代表的なのは丹下健三の「国立屋内総合競技場（現国立代々木競技場）」で、機能・構造・表現を総合的につくりあげる丹下の考え方が明快に見られ、構造的表現が多かった世界的潮流の中で、日本を代表する傑作ができた。その後、1970年に大阪で日本万国博覧会が開催され、科学技術がどのように都市や建築、人間に影響するのかということが万博ではじめて表現された。

技術や合理化が建築に求められる中、大成建設が設計施工した「ホテルニューオータニ」はオリンピック開催に合わせて1964年に開業されたが、17カ月という短い工期をいかに合理的に解決するかに焦点が当てられていた。そこで使われたのが最新の技術である。たとえば、高層部の軽量化と工期短縮のために採用された

ホテルニューオータニ／提供：(株)ニュー・オータニ

1976 節水消音便器「CSシリーズ」発売

1977 戸建住宅用浴室ユニット発売

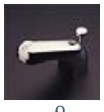
1980 温水洗浄便座「ウォシュレット®」発売

1981 システムキッチン発売
水栓向け セラミックバルブ 量産開始

1984 自動水栓発売

1985 シャンプードレッサー発売

1988 「音姫®」発売
静電チャック 量産開始



1989 自動水栓「アクアオート」発売

1993 「ネオレストEX」発売

1976 1977 1980 1981 1984 1985 1988 1989 1993

詳細情報及び、1990年以降の情報については、TOTO100周年サイトで公開しています。
また、随時コンテンツを追加しています。
TOTO100周年サイト公開中 http://www.toto.co.jp/100th/

カーテンウォール工法。そしてTOTOが1963年に開発した「ユニットバスルーム工法」である。「ユニットバスルーム工法」は搬入しやすいように器具や給排水管を組み込んだ腰下フレームと上部壁フレームに分けて工場で製作し、現場で合わせるという斬新な工法で、1,044室の浴室工事を工場製作から現場設置まで約3.5カ月で完了させた。

また、1968年完成の日本初の超高層建築「霞が関ビルディング」では、配管ユニット、衛生器具、仕上げ材を組み合わせたTOTOの壁付けサニタリーユニットが採用され、工期短縮に貢献するとともに、オフィスビルの水まわり設備の標準化が進んだ。

1970年代に入ると、世界的に水不足と水質汚染が問題になり、折しも、日本では都市型の住宅が増加し水洗便器が採用されるなど水の需要が高まり、節水の機運が盛り上がった。TOTOは1976年に節水消音便器「CSシリーズ」を発売し、20ℓだった洗浄水量を13ℓまで削減した。この節水技術への取組みは現在でも続いており、2012年に発売された「ネオレストハイブリッドシリーズ」では3.8ℓ洗浄を実現している。

霞が関ビル／撮影：新建築社写真部

バブル期
個性を表現する時代へ

1980年代に入るとポストモダンが建築界を席巻する。合理性をつきつめた装飾のない四角い箱だった近代建築に対する反動で、装飾的であり多様性をもつ建築が現れる。米国の建築家、マイケル・グレイブスの設計で1982年に完成した「ポートランドビル」は象徴的な意味を取り戻すために、さまざまな装飾的操作がされた建築で、ポストモダン建築の代表である。普遍的、一律的に建築を普及させた近代主義から、固有性を取り戻そうとした時代ともいえよう。

TOTOにおいても独自の技術が生まれてきたのがこの時代である。TOTOの技術を一躍世間に広めた温水洗浄便座「ウォシュレット®」は1980年に発売された。それ以前から米国で医療向けにつくられた温水洗浄便座を輸入・販売していたが、温度の安定性など機能的に限界があった。しかし、清潔志向の強い日本人に「温水洗浄便座」という商品が幅広く受け入れられるであろうという判断からTOTO独自で研究開発が進められ現在では出荷台数も4,000万台を超える日本を代表する商品となった。

ポートランドビル／撮影：新建築社写真部

1985年に発売された「シャンプードレッサー」も個性的な製品だ。洗髪ができるようシャワー水栓を搭載した洗面化粧台で「朝シャン」ブームを巻き起こした。また1970年代に「システムキッチン」が海外から輸入され、一部の住宅で採用されたことを受けて、日本のメーカーも参入し始めた。TOTOでも「システムキッチン デラックスシリーズ」を1981年に発売した。

パブリック商品も進化をしていく。手を出せば水が出て遠ざけると止まるという「自動水栓」もこの頃に発売された（1984年）。現在は自己発電も行い節水、節電できる商品に進化している。

この後、バブルは崩壊し経済は後退していくことになるが、現在につながる製品が次々と生み出される。TOTOを代表するタンクレストイレ「ネオレスト」は1993年に登場した。「最高水準の次世代型便器、従来の固定概念を覆す」という目標を掲げ、機能はもちろんのことデザインにおいても世界で通用するために開発されたもので、タンクレスを実現するために洗浄水の流し方も見直された。その後、セフィオンテクト、フチなし便器、トルネード洗浄、ハイブリッドエコロジーシステムなど常に新しい技術が取り入れられている。

1917年の創立時は、すべての手本は海外にあった。しかし日本の文化に合わせ独自の技術開発をすることで、現在では世界をリードする水まわり総合メーカーに発展した。

TOTOは創立100周年を迎えるにあたってウェブサイトを設けた。こちらのサイトもご覧いただければと思う。

1914 国産初の腰掛式水洗便器の開発に成功

1946 水栓金具生産開始

1958 FRP浴槽「トートライトバス」発売

1963 ユニットバスルーム工法開発

1968 洗面化粧台シングルレバー混合栓発売

1970 ホーローバス発売

製陶研究所設立
衛生陶器の製造開始
1912

1914
第一次世界大戦始まる
「東洋陶器株式会社設立」

1917
三河島下水処理運用開始

1922
関東大震災

1923
帝国議会議事堂（国会議事堂）竣工

1936
第二次世界大戦始まる

1939
第二次世界大戦終結
戦後復興始まる

1945

1946

1951
サンフランシスコ講和条約調印

1955
日本住宅公団設立

1958
東京タワー竣工

1962
サーモスタット混合栓発売

1963
ホテルニューオータニ着工

1964
東京オリンピック開催

1968

1969
「Toyotoki」から「TOTO」へ商標変更

1970
「東陶機器株式会社」に社名変更

1975
小便器節水システム「USシステム」発売

TOTOの最新情報

TOTO News 1

世界各地に海外直営ショールームを展開しています

TOTOは2016年9月、米国の旗艦ショールームとなる「TOTO Corporate Gallery」をニューヨーク市内中心部5番街沿いに移転オープンいたしました。これに続き、新たにサンフランシスコにも、ウォシュレットを紹介するブランドショールームをオープン。
アジア地域では、ベトナム初の直営ショールームをホーチミンにオープン、タイ・バンコクのショールームは移転拡張しました。TOTOは海外直営ショールームを通し、独自の技術やブランドを世界のお客さまに広く発信してまいります。

TOTO News 4

TY新潟コラボレーションショールームが12月11日にオープンしました

TOTO、YKK APの2社（以下TY）は2016年12月11日に「TY新潟コラボレーションショールーム」を新潟市中央区にオープンしました。
TY2社のコラボレーションショールームになったことにより、お客さまにワンストップで、水まわりから、窓、玄関ドア、エクステリアまで、実際に商品を見て触って、体感していただくことが可能になりました。
これからも2社の連携を強化し、住まいづくりのご提案をさらに充実させ、お客さま満足の向上を目指します。

TOTO News 3

「Dow Jones Sustainability Indices（DJSI）World」に6年連続で選定されました

DJSIは、米国S&Pダウ・ジョーンズ社とスイスの社会的責任投資に関する調査専門会社のロベコSAM社が提携して開発した指標で、「経済」「環境」「社会」の3つの側面から企業を分析します。持続可能性（サステナビリティ）にすぐれた上位約10%の企業を「DJSI World」に選定。2016年度は、世界の大手企業約2,500社のなかから316社が組み入れられており、TOTOは6年連続の選定となりました。

MEMBER OF
Dow Jones Sustainability Indices
In Collaboration with RobecoSAM

S&P
ダウ・ジョーンズ社の
ロゴマーク

TOTO News 2

バスルーム取扱説明書が最高評価の「マニュアル オブ ザ イヤー」を受賞しました

一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会が主催する「日本マニュアルコンテスト 2016」において、バスルーム『サザナ プレミアムHG／HS』『マンションリモデル WG／WT』の取扱説明書が、最も評価の高いマニュアルを表彰する「マニュアル オブ ザ イヤー」を受賞しました。
バスルームを「末永く、きれいに」使うための使用説明が「見やすく・探しやすく・読みやすく」記載されている点が高く評価されました。「日本マニュアルコンテスト」は日本で唯一の使用情報のコンテストであり、近年は海外からも注目されています。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

www.toto.co.jp/publishing/

TOTO出版のお知らせ

Book

『堀部安嗣
建築を気持ちで考える』

時代の流行に流されず、独自の建築をつくりつづける堀部安嗣。本書は堀部氏が建築をつくるうえで、とくに重要となった建築体験と、43作品の設計プロセスをもとに、その時々にどんな気持ちで建築を考えたかをエッセイ形式で書き下ろしたもの。さらに堀部氏ならではの視点で撮影された写真や手描きの水彩図面、スタディスケッチなどもふんだんに掲載。作品集とは異なるかたちで建築家の魅力と思考にせまった1冊。

- 著者／堀部安嗣
- 定価／2,200円+税（予定価格）
- 体裁／A5、ソフトカバー、320ページ、和文
- 発行日／2017年1月19日（予定）

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方のなかから、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。

Present!

セラのお知らせ

おかげさまで30周年
選ぶたのしみ、使うよろこび、これからも

私たちセラトレーディングは、
選りすぐりのアイテムを揃える水まわりの
セレクトショップとして、TOTOグループ
から誕生しました。
つねに海外のトレンドを追求し、
毎日の暮らしを豊かに彩る商品をお届
けしています。
たくさんの方に支えられて、
セラトレーディングは、2016年12月1日、
設立30周年を迎えました。
これからも「Design」「Quality」「After
Service」をモットーに心地よいライフスタ
イルを実現するお手伝いをしていきます。

ANNIVERSARY 30th 1986 2016

セラトレーディングホームページでは、これまでの感謝とこれからの想いを込めて、特設ページをリリースしました。30年間の時代性や水まわりの変遷を感じていただけます。是非ご覧ください。
www.cera.co.jp/anniversary/

Information

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

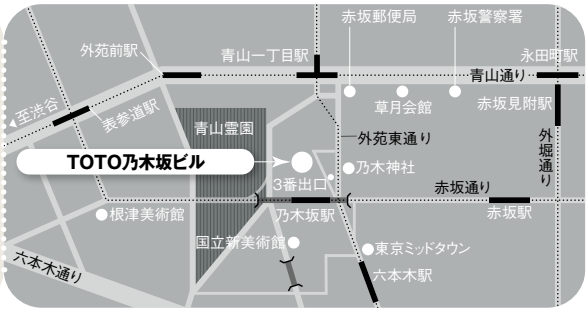
お申し込みはTOTO通信データ管理室まで → Tel / 093-513-6234　e-mail / toto_tsushin@jlink-net.com

＊法人あての送付となります。

Bookshop TOTO
Bookshop TOTO
- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03(3402)1525
- 定休日／日曜日・月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・夏期休暇・年末年始

TOTO出版
TOTO Publishing
- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03(3402)7138
- ファクス／03(3402)7187
全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

セラトレーディング
Cera Trading
- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階・地下1階
- 電話／03(3402)7134
- ファクス／03(3796)6155
- 営業時間／10:00～17:00
- 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始



アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2017年4月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2017年 新春号

TOTO通信 2017年 新春号 第61巻・第1号 通巻513号
発行日:2017年1月1日 発行所:TOTO株式会社 メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

TOTO

A VOYAGE TO WATER

Everyday Pleasure,
Passion in Every Space

さりげない毎日に、歓びを。何気ない空間に、ときめきを。

Special site : TOTO water technology http://www.toto.co.jp/watertech/
商品サイト : TOTO new material http://www.toto.co.jp/products/tnm/

お客様相談室 0120-03-1010 受付時間 9:00－17:00(夏期休暇・年末年始を除く) www.toto.co.jp/

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。

8178